The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	使役と受身の曖昧性はどこからくるか? : 韓国語の動詞接辞 -i/-hi/-li/-ki の機能を求めて
Author(s)	鄭, 聖汝
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2008, 48, p. 97-166
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6505
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

使役と受身の曖昧性はどこからくるか？

―― 韓国語の動詞接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能を求めて ――[(1)]

鄭　聖汝

1．はじめに

使役と受身を同じ土台の上にのせて論ずるべく必然性は，言語事実に基づくと十分な動機がある。韓国語を含むいくつかの言語では，使役と受身が同一形式で表され，しかも一つの構文を両者が共有し，使役と受身の両方の解釈を許すような状況があるからである（1．1節および2．1節参照）。しかしながら，過去50年間のヴォイス研究の歴史を眺めてみると，少なくとも初期の約20年間においては，このことを必ずしも正当に取り扱えるような状況ではなかったように思われる。57年以降変形文法のパラダイムでは，受身は項構造を減少させるものとして，他方の使役は項構造を増加させるものとして，その形式的側面だけが重視されたため，両者の関連を正当に議論できるような枠組みが用意されなかったからである。

しかしこのような状況は80年代に入り，認知言語学の台頭と共に変化が現れたように思われる。一つの動詞形態が担うさまざまな関連構文が，歴史的展開ないし文法化の観点から捉えられるようになったからである（Bybee 1985, Shibatani 1985, Haspelmath 1990など）。このような理論的・方法論的な転換は，抽象的な統語構造よりは具体的な形を言語分析の中心に据え，さらにある一つの形式が担う共時的分布は通時的発達による結果の産物と見なされたことにより可能となったのである。このような立場をとってみると，韓国語の動詞接辞 *-i/-hi/-li/-ki* が表すように，一つの動詞形態が使役と受身の両方に使用でき，しかも構文を共有するような状況を，一方から他方への展開ないし文法化の結果と捉え，一方が他方の起源である，とする（進化論的な）考え方も十分ありうるであろう。

実際 Haspelmath (1990) はこのような観点から，使役を起点にして，使役再帰（reflexive-causative）の中間段階を経て受身へと展開した，というシナリオを提案した（図1を参照。李 1991も同様）。しかしこのシナリオのように，ある一点を起点にして他方への展開と見なす一方向性の考え方は，現象の外側から見て，共時的分布を通時的発達の産物と捉えた結果，そこに線的な繋がりがあるように見えただけであって，現象の内部から見て，本当に両者の

（1）本研究は，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所平成17年度第一回『形態・統語分析における Ambiguity（曖昧性）― 通言語的アプローチ ―』プロジェクト研究会で口頭発表した鄭（2005）に大幅な修正を加えて作成されたものである。貴重なコメントを下さったプロジェクト共同研究者および出席者の皆様には心より感謝申し上げる。

関連がわかったとは，言い切れないように思える。つまり，このシナリオには共時的分布の範囲を機能的観点から捉えようとする視点，すなわち使役と受身の共通の機能（意味基盤）は何なのか，という問いに答えようとする視点が欠けていた，といわざるを得ない。[(2)]

一方，Shibatani（2006）の最近の研究によれば，ヴォイス現象は行為の発達（evolution of action）の観点から捉えられ，次のようなヴォイス・パラメータが提案されている。このパラメータの中で，使役は「行為の起源」のパラメータに属し，一方受身は「行為の起源」を問題にしながら，語用論的に動機づけられたものとして考えられている。

ヴォイスの主なパラメータ

Ⅰ　行為の起源

a．行為はどのようにもたらされるのか

b．行為の起源はどこにあるのか

c．動作主の本性は何か

⇨　行為の起源に属するパラメータ：自発，使役

Ⅱ　行為の展開

行為はどのように展開されるのか

a．行為の展開が動作主自身の領域を超えていくのか，それとも，動作主自身の領域内にとどまるのか（中相）

b．その行為は，被動者において意図された結果として達成されたのか，それとも，達成されず失敗に終わったのか（逆受動）

⇨　行為の展開に属するパラメータ：中相（middle），逆受動（antipassive）

Ⅲ　行為の終結

行為がその事態への直接参加者を超えて，正常のものよりもっと展開され，ある追加的な存在において終結されるのか。

⇨　行為の終結に属するパラメータ：受益（benefactive），充当相（applicative）など

語用論に動機づけられたヴォイス・システム

a．受　　身：行為が談話への関連性において，少なくとも被動者よりも低いか極めて低い動作主とともに発生されたか。

b．インヴァース：行為が，談話への関連性において被動者より高い動作主において発

（2）使役と受身のように異なる領域のものが同じ形態で現れることは，形態学の用語を借りれば，相似である。解剖学者の養老孟司（2004：第四章）によれば，たとえば，サカナとイルカと魚竜は，本来（起源的に）まったく違ったものであるが，水棲に対する適応として，たがいに体形が類似する。つまり，相似を生じる典型的な場合は機能の要請であり，相似に見られる「構造の一致」は典型的な機能形態，すなわち「機能が形態を決める」例である。したがって，本稿のアプローチは「起源を同じくする」という相同に基づく進化論的な観点ではなく，相似に基づく機能的類似の観点に立つことになる。

生されたか（ダイレクト），そうでないか（インヴァース）。

本稿では，韓国語の使役と受身をともに「行為の起源」パラメータの観点から分析し，両構文に関与する接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能を探りたい。その上，この接辞が関与する自発・可能などの関連構文にも考察を広げ，「行為の起源」パラメータが韓国語のヴォイス現象をどのように説明できるかを検討し，その有効性を検証したい。結論からいうと，具体的な分析では Shibatani（2006）と若干異なる点があるものの（3．1節参照），「行為の起源」パラメータの観点は，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* が関与する構文全体の成立のみならず，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能の説明にも有効である。

したがって本稿の当面の目的は，とりあえず接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能からみた使役と受身の関連，すなわち共通の意味基盤は何か，を追究することである。そのために以下では，（i）韓国語において接辞 *-i/-hi/-li/-ki* が関与する構文全体を，現代語における共時的分布を基盤に（できるだけ）充実に記述する。その上に立って，（ii）接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能は一体何なのかを追究し，最終的には（iii）使役構文と受身構文はどのように関わり合うことになるのか，を浮き彫りにする。

このような議論を通して，Haspelmath（1990）のシナリオは少なくとも韓国語のヴォイス現象の説明には不適切であることを見ていく。そして，「行為の起源」の観点を取り入れれば，使役と受身，さらには自発・可能までも，共通の意味基盤をもった接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の派生構文であることが説明できると主張する。

1．1 Haspelmath（1990）のシナリオと韓国語のパズル

韓国語のように（(2b）参照），一つの形式を使役と受身が共有し曖昧性を生ずる言語は，他にも満州語，ウィルタ語，エヴェン語などツングース諸語に属する多数の言語とトルコ語，モンゴル語，中国語，フランス語，英語など通言語的にも多く見られるという報告がある（Haspelmath 1990, Malchukov 1993, Washio 1995, 佐々木 1997, 風間 2005, 栗林 2005 など）。[3]

このような状況に対する現在最もよく知られた仮説は，上で述べたように，使役から受身への発達，すなわち使役を起点にして，使役再帰の中間段階を経て受身に辿りつく，というシナリオである（Haspelmath 1990, 李 1991も参照）。Haspelmath（1990：46）が英語の例で説明した（1），および下記の図1を併せて参照されたい。（図1のイタリック体と強調

（3）佐々木（1997：136）によれば，中国語は「我叫他打了」という文が「僕は彼に殴らせた」と「僕は彼に殴られた」の二つの解釈ができ，曖昧である。英語も *John had/got his car stolen.* のように受身解釈ができる状況がある。鷲尾（2005：8）によれば，フランス語の *se faire* 使役構文も受身が可能である。

は筆者。)

このシナリオのポイントは，主語の動作主性の消失（主語が非動作主になる）と被使役者の背景化である。Haspelmath（1990：47）は，被使役者が（1b）に対応するような（与格または）道具格で標示され背景化されたときには，被使役者が何かをしたことよりは被動者（*myself*）に何かが起こったことが最も重要なこととして含意されるという。このことから（1c）のように，影響を被った被動者は受身文の主語になれることが示されている。なお一方向性（unidirectionality）に対するサポートとしては，使役は受身になれるが，受身が使役になるようなケースは見当たらない（*ibid.*：49），という事実に頼っている。

（1）a．I have the barber shave me. (causative)
　　b．I have myself shaved by the barber. (reflexive-causative)
　　c．I am shaved by the barber. (passive)

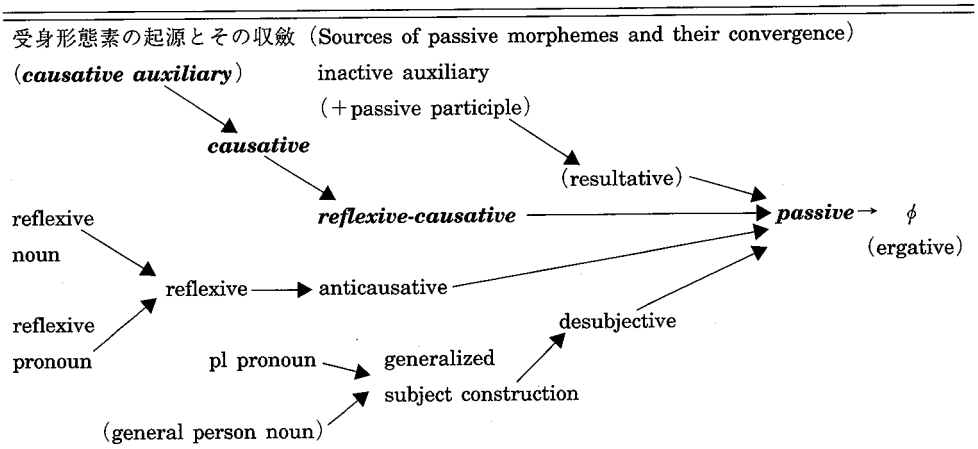

図1　Haspelmath（1990：54）

このシナリオは，韓国語学研究者の間には広く受け入れられているように見受けられる（李 1991，Yeon 1991，権 1993：38，Park 1994，Kim 1995：415-421など。ただし，李1991はHaspelmathと独立した研究であるが，ほぼ同じ結論に至っている）。またこのシナリオを直接には言及しない場合でも，使役と受身の関連を取り上げた多くの研究では，接辞*-i/-hi/-li/-ki*を同一形態素と見なしており，少なくとも別の形態素とは見なしていないように見受けられる（李 1970，Lee 1974，朴 1978，金 1979，梁 1979，Kim 1982，鷲尾 1997，Kim 2005など）。[4]

ところが，韓国語の言語事実をもう少し注意深く観察してみると，このシナリオをその通

り認めるには議論が不十分である，といわざるを得ない状況が見つかる。下記の表1に見られるように，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* は使役・受身だけでなく，他動詞・自動詞にも関与するのである。（ただし他動化には *-wu/-kwu/-chwu* も現れる。受身1，受身2の区別は，3.2節を参照。）

接辞*-i/-hi/-li/-ki* のパラドクスとパズル				
基本動詞		他動化・使役化		
①自動詞	→	他動詞	*maluta*‘乾く’	*mal-li-ta*‘乾かす’
②自動詞	→	使役	*ketta*‘歩く’	*kel-li-ta*‘歩かせる’
③他動詞	→	他動詞	*ssista*‘（自分を）洗う’	*ssis-ki-ta*‘（他者を）洗う’
④他動詞	→	使役	*mekta*‘食べる’	*mek-i-ta*‘食べさせる’
基本動詞		自動化・受身化		
⑤自動詞	→	自動詞	*colta*‘居眠りする’	*col-li-ta*‘眠たくなる’
⑥他動詞	→	受身1	*chata*‘蹴る	*cha-i-ta*‘蹴られる’
⑦他動詞	→	自動詞 or 受身2	*yelta*‘開ける’	*yel-li-ta*‘開く’，‘開けられる’

表1

すなわち，一つの形態が動詞パラダイム全体に関わっているこのような状況をみると，使役と受身だけにとどまらず，自動詞や他動詞も含む，共時的分布全体を包括できるような枠組みが要請されることがわかる。

この問題について，本稿の考え方は次のようである。（i）なぜ他動化と自動化にも同じ形式が共有できるか。この問題はおそらく使役と受身の関連よりも根本的であり，先決問題である。[5]（ii）この問題の解決にも，やはり接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能は何か，という観点からの考察が必要であり，使役と受身の関連はそのような考察の上で説明されるべきである。つまり，ここで議論したいのは，使役と受身の曖昧性について，なぜこうしたことが生じたか，というその起源についてでなく，こうしたことが生じる前提は何か，を問題にすることである。そして，その前提なるものを接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能に求めて追究しようとするのが，本稿の試みである。

結論からいうと，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能は次のようである。（i）この接辞は，被動者を表現の中心におき，行為の起源を述べる形式である。この場合，被動者は必ず文法的項としてコード化し，最小限の表現では被動者のみとなることもある。（ii）行為の起源（始発動作主，原因）も外的要因（external cause）として必ず導入する。ただし（iii）認知的

（4）しかし統語的な相違を重視すれば，別の形態素と見なす立場もあり得る。
（5）使役と受身においては形式の共有が見られない言語でも，日本語の形態素 *-e* のように，自動詞と他動詞の間では共有が見られる言語はしばしばある。英語は *break*，*open* のように，明示的な形態素は現れないが，自他同形である（Fillmore 1968参照）。

に明示的な場合にのみ，それを文法的項としてコード化し，認知的に明示的でない場合は，文の意味に含意される。この結論によると，表1のように一つの動詞形態が，ヤヌスの顔のように，反対方向の文法領域両方を表すことができても，それらの関連を一方から他方への発達として捉えなくてもよい。つまりその機能を考慮すれば，両者は同時に成立しうるものである。

本稿の構成は次である。2節では，使役と受身の間に見られる三種類の再帰構文を定義し，各構文間の連続関係を「行為の発達」の観点から分析する。具体的には行為の起点と終点，行為の遂行の三つの局面を導入し，(6) それぞれの局面において，それぞれの事態参加者は何か，その意味的機能は何か，その参加者の文法的コード化はどうなっているのか，という観点から分析を行う。3節では，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* が関与する関連構文の範囲を定め，構文間のネットワークを示した後，この接辞の機能を提案する。4節では，派生の方向からみたヴォイス・カテゴリーの連続性を示し，使役と受身の意味対立がどのように生じるかを示す。5節では結論を述べる。

2．使役と受身の間

2．1　使役と受身の曖昧性

韓国語における使役と受身の曖昧性は，上述したように，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* が使役にも受身にも用いられる，ということから発生する。たとえば，*mwulta*‘噛む’，‘咥える’という他動詞にこの接辞を付加すると，次のように使役と受身の両方の解釈が可能になる。

（2）a．ai-ka　emeni-uy　cec-ul　mwul-ess-ta.（他動詞）
　　子供-NOM　母親-GEN　おっぱい-ACC　噛む-PAST-DEC
　　‘子供が母親のおっぱいを噛んだ。’
　　b．emeni-ka　ai-eykey　cec-ul　mwul-*li*-ess-ta.（使役／受身）
　　母親-NOM　子供-DAT　おっぱい-ACC　噛む-CAUS/PASS-DEC
　　‘母親が子供（の口の中）におっぱいを（入れてやって）咥えさせた。’
　　（母親が子供にお乳を飲ませた。）
　　‘母親が子供におっぱいを噛まれた。’

ここでまず注意されたいのは，使役と受身の間に見られる動詞の意味的な相違である。基

（6）ここで導入される三つの局面は，Shibatani（2006）の三つのパラメータの「行為の起源」「行為の展開」「行為の終結」とは異なる。詳細は2節を見られたい。なお，ヴォイスとアスペクトの区別については，Shibatani（2006：220-221）を参照されたい。

本形動詞には‘噛む’と‘咥える’の二つの意味があるが，使役では‘咥える’の意味しか表せず，他方受身では‘噛む’の意味しか表せない。このことは，両構文が共有する対格名詞句の意味機能にも微妙な変化をもたらす。すなわち，使役構文では身体部分のおっぱいが子供の口に運ばれていく移動物のように捉えられるが，受身構文では影響を受ける，いわば静止物としての被動者として理解されるということである。この点は，以下の分析において引き続き注目される要素であるため，予め言及しておく。

ところが，すべての動詞が生産的に上のようなパターンを示すのではない。次の他動詞は，この接辞を用いた使役構文は作れないし，使役と構文を共有する場合の受身も成立しない。（派生の方向と動詞リストは4節を参照。）

（3）a．ai-ka　mwun-ul　yel-ess-ta.（他動詞）
　　子供-NOM　戸-ACC　開ける-PAST-DEC　‘子供が戸を開けた。’
　b．*emeni-ka　ai-eykey　mwun-ul　yel-*li*-ess-ta.（*使役／*受身）
　　母親-NOM　子供-DAT　戸-ACC　開ける-CAUS/PASS-DEC
　　意図：‘母親が子供に戸を開けさせた。’
　　意図：‘母親が子供に戸を開けられた。’

また，上記の（2b）も（4）のように直すと，使役解釈のみ可能となり，受身解釈は許されない。このことから，（2b）の受身解釈の許容は対格名詞句に主語の身体部分が現れる状況にその原因が求められ，再帰的状況と関連付けて論じられるのが一般的である（朴 1978，李 1991，Park 1994，Kim 1995：415-421，鷲尾 1997など）。[7]

（4）emeni-ka　ai-eykey　wuyupyeng-ul　mwul-*li*-ess-ta.（使役／*受身）
　母親-NOM　子供-DAT　牛乳のビン-ACC　噛む-CAUS-DEC
　‘母親が子供（の口の中）に哺乳瓶を（入れてやって）咥えさせた。’

2．2 使役再帰と制御再帰

次の例を見られたい。（5）は使役再帰の例である（Yeon 1991，鄭 1999）。構文的には（2b）とまったく同じなので，使役と共に受身の解釈も許容されると予測される。しかし，使役再帰は（2b）と異なり，対格名詞句に身体部分が現れても受身解釈はすわりが悪い。しかしながら，この文も状況から見ると，受身的状況が見られなくはない。すなわち（5）

（7）このような状況を踏まえた上で，Washio（1995）と鷲尾（1997）では韓国語の受身の成立を説明するパラメータとして，関与（inclusive）と排除（exclusive）を提案している。

が表す状況は，行為の起点（the starting point of an acton）からみると，主語自身が自らその男のところに移動して行き，自分の体を（寄せて）その男に抱かせた使役の状況となるが，行為の終点（the end-point of an action）からみると，その男に抱かれた受身の状況が見られる。このことから使役再帰の成立は，行為の終点において，客観的には受身的状況が見られても，それが言語的意味としては反映されず，行為の起点にある使役的状況だけを際立たせるところに成立する，といえよう。

（5）Yengi-ka　ku namca-eykey　mom-ul　an-*ki*-ess-ta.（使役再帰／??受身）
ヨンイ-NOM　その男-DAT　体-ACC　抱く-cauREFL-PAST-DEC
‘ヨンイがその男に（自分の）体を（寄せて）抱かせた。’

次に，対格の身体名詞句を削除することによって成立する文もある。（5）と（6）を比較されたい。この二つの文を比較した場合，意味的にも統語的にも受身により近い表現は使役再帰ではなく，（6）であるといえる。すなわち，（6）には身体名詞句が現れないので，受身のように項の数が減少している。しかしながら，客観的には使役再帰に似たような状況が見られる。つまり，主語自身が自ら母親（の胸）に自分の体を寄せて抱きつき，その行為の結果として抱かれた状況があると理解されるのである。すなわちこの文の成立は，行為の起点にある使役的状況が見られなくはないが，それが言語的意味としては反映されず，行為の終点の受身的状況だけを際立たせるところに成立する，といえよう。しかしながら，この文も完全に受身と認めるわけにはいかない。なぜならば，この文の主語は，その事態をひき起こした「始発動作主」（initial agent）としての性質を相変わらず保持しているからである（（7b）も参照）。本稿ではこれを受身と区別し，中相（middle）の一つとして「制御再帰」（controlled reflexive）と呼ぶことにする。[8] ここで「制御再帰」は，統語的にも意味的にも受身により近いが，主語自身がその事態をひき起こす始発動作主である，という性質は相変わらず保持しているところに成立する，と定義できる。

（6）ai-ka　emeni-eykey　an-*ki*-ess-ta.（*使役／？受身／制御再帰）
子供-NOM　母親-DAT　抱く-conREFL-PAST-DEC
‘子供が母親に（自分の体を寄せて）抱きつい（て抱かれ）た。’

（8）Park（1994）では，このような構文を Caused-Passive CMC（Causative Marker Construction）と呼んでいる。本稿の「制御再帰」は2．3節の「非制御再帰」（non-controlled reflexive）と対比されるものとして，鄭（1999）で導入された用語である。

この状況を次のようにまとめてみよう。客観的状況から見ると（5）と（6）の事態構造はほとんど変わらない。両者の主語は行為の起点であると同時に，行為の終点でもある。すなわち，行為の起点では始発動作主であり，終点では被動者（patient）である点で両者は同じである。しかしながら，（5）のように身体名詞句が言語化される使役再帰では，始発動作主の動作主性の方が前景化し，概念化される。Langacker（1987）の術語を借りると，使役的状況がプロファイルされ，言語的意味を担う。一方，（6）のように身体名詞句が言語化されない制御再帰では，[9] 始発動作主の動作主性は背景化される。したがって行為の終点，すなわち受身的状況がプロファイルされ，言語的意味を担う，という具合である。要するに，図2のように，両構文は客観的にはほぼ同じ状況を表す事態である。しかし，移動物としての身体を始発動作主から言語的に分離し，それを対格名詞句として言語化するか否かによって，前景化の位置が異なる二つの構文が成立する，という関係である。第二動作主が担う行為の局面については，次節を見られたい。

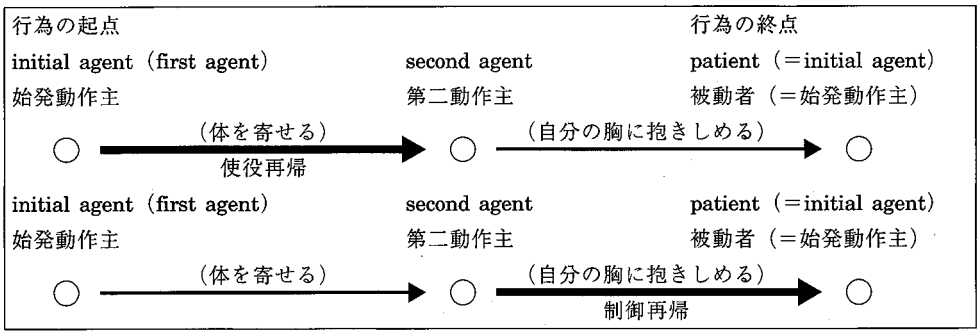

図2　*ankita* の使役再帰と制御再帰の事態構造とプロファイル

四つの構文 —— 使役，受身，使役再帰，制御再帰 —— において，それぞれの主語が始発動作主としての性質を保持しているかどうかは，次のような「*tallyekase* 挿入」テストから確かめることができる。予測通り，（7）（8）の主語を走っていく移動動作主として解釈した場合は，（8）の受身解釈のみ不自然であることがわかる。[10]

（7）a．Yengi-ka　ku namca-eykey　*tallyekase*　caki mom-ul
　　ヨンイ-NOM　その男-DAT　走っていって　自分の体-ACC

（9）制御再帰では身体名詞句が主語に包入される，という言い方もできよう。
（10）もし（8）を時間的な前後関係ではなく，「母親が子供のところに走っていったために，子供におっぱいを噛まれた」という因果関係の理由節として解釈すれば，文脈的に不自然さはあっても，受身解釈はできなくはない。しかし，それはここで意図する解釈ではない。

an-*ki*-ess-ta.（使役再帰）
抱く-cauREFL-PAST-DEC
‘ヨンイがその男（のところ）に走っていって自分の体を（彼の胸に寄せて）抱かせた。’

b．ai-ka　emeni-eykey　*tallyekase*　an-*ki*-ess-ta.（制御再帰）
子供-NOM　母親-DAT　走っていって　抱く-conREFL-PAST-DEC
‘子供が母親（のところ）に走っていって抱きつい（て抱かれ）た。’

（8）emeni-ka　ai-eykey　*tallyekase*　cec-ul
母親-NOM　子供-DAT　走っていって　おっぱい-ACC
mwul-*li*-ess-ta.（使役／??受身）
噛む-CAUS/PASS-DEC
‘母親が子供（のところ）に走っていっておっぱいを（口の中に入れてやって）咥えさせた。’
受身の直訳：‘母親が子供に走っていっておっぱいを噛まれた。’

ここで，Haspelmath（1990）のシナリオを検討してみよう。上記の *ankita* が表すような使役再帰から制御再帰への連続性をみる限り，（1）のシナリオはそれほど間違っていないように思えるかもしれない。Haspelmath がいうとおり，使役者は動作主性を消失し非動作主となっていく過程が見られるからである。

ところが，韓国語には Haspelmath が考えていない例が見つかる。（9）のように，使役再帰は不可能であるが，制御再帰は可能な例がある。この場合（9c）の制御再帰の成立は，使役構文から対格名詞句削除によって直接得られたとはいえるが，使役から使役再帰の中間段階を経て成立したとはいえない。つまり，使役再帰の状況を表せない（9a）の使役構文も移動物（赤ん坊）を言語化しなければ，主語自身が始発動作主（移動者）兼被動者となる（9c）の制御再帰が成立するのである。この例の存在は，使役と受身の関連がそう単純ではないことを物語っている。別の可能性があり得ることについては，2.4節を見られたい。

（9）a．emeni-ka　yengi-eykey　aki-lul　ep-*hi*-ess-ta.（使役）
母親-NOM　ヨンイ-DAT　赤ん坊-ACC　おんぶする-CAUS-PAST-DEC
‘母親がヨンイ（の背中）に赤ん坊を負ぶわせた。’

b．*emeni-ka　yengi-eykey　mom-ul　ep-*hi*-ess-ta.（使役再帰）
母親-NOM　ヨンイ-DAT　体-ACC　おんぶする-cauREFL-PAST-DEC
‘母親がヨンイ（の背中）に（自分の）体を負ぶわせた。’

c．emeni-ka　yengi-eykey　ep-*hi*-ess-ta.（制御再帰）
　母親-NOM　ヨンイ-DAT　おんぶする-conREFL-PAST-DEC
　‘母親がヨンイ（の背中）に負ぶさった。’

以上を行為の発達の観点からまとめると，表2となる。すなわち使役と受身は，始発動作主と被動者が異なる個体であり，完全に分離しているため，両者（始発動作主と被動者）の間の意味的な混同は生じない。しかし使役再帰と制御再帰では，主語は始発動作主であると同時に被動者でもあり，両者が未分化の状態である。しかしながら，使役と同じ統語構造をもつ使役再帰では，受身解釈よりも使役解釈の方が優位である。他方，受身のように項が減少される制御再帰では，使役解釈より受身解釈の方が優位である。（表2では，優位な方を＝，優位でない方は≒で示した。）この状況は，行為の起点をプロファイルするか，行為の終点をプロファイルするか，というプロファイルの相違から説明できる。ここではそれを起点プロファイル（starting point profile：SPP）と終点プロファイル（end-point profile：EPP）とする。

構文	行為の起点	行為の終点	身体（部位）対格名詞句	意味解釈
使役	主語＝始発動作主	主語≠被動者	可	使役
使役再帰	主語＝始発動作主	主語≒被動者	可	SPP による使役優位
制御再帰	主語≒始発動作主	主語＝被動者	不可	EPPによる受身優位
受身	主語≠始発動作主	主語＝被動者	可	受身

表2　使役と受身の間（1）

表2から見えてくるのは，構文間の連続性と不連続性である。すなわち，使役・使役再帰制御再帰の三つの構文は，主語が始発動作主であることから連続的な関係が認められ，受身とは異なる。一方，使役再帰・制御再帰・受身の三つの構文は主語が被動者であることから連続的な関係が認められ，使役とは異なる。最後に，身体（部位）の対格名詞句の可否からみると，制御再帰だけが他の三つの構文と異なり，不連続である。

なぜ，制御再帰だけが身体（部位）を対格名詞句にコード化できないだろうか。本稿では図2の事態構造に基づき，次のような制約を仮定する。

(10) 身体（部位）対格名詞句の言語的コード化制約[11]

身体（部位）の対格名詞句へのコード化は，移動物としての身体（部位）であり，かつ起点プロファイル（SPP）か，もしくは，移動物の身体（部位）でなく，かつ終点プロファイル（EPP），のときに一般的に許容される。

したがって，制御再帰（の文で想定される身体部位）は使役再帰（で現れることのできる身体部位）と同様に移動物としての身体（部位）ではあるが，EPP であるため対格名詞句として現れることが制約される。一方，受身（に現れる身体部位）は（(2b) のように）EPP であるが，移動物の身体として捉えられないため制約されない，という説明が与えられる。

2.3 主格名詞句と与格名詞句の機能的連続性

表2では，行為の起点と終点における主語の意味性質，すなわち主格名詞句の意味的機能の観点から四つの構文を分類した。改めて示すと，(11) の連続性が見られる。(11) から，主語名詞句の動作主性は段々と背景化が進み，受身に至っては完全にその動作主性を消失し，被動者としての意味機能しか残らない，というプロセスが読み取れるであろう。

(11) 主格名詞句の機能的連続性（始発動作主から被動者へ：動作主性の程度）

使役	使役再帰	制御再帰	受身
始発動作主 ＞	始発動作主（・被動者）＞	（始発動作主・）被動者 ＞	被動者

一方，与格名詞句の場合はどうなるのだろうか。実は，上記の四つの構文において，与格名詞句は「動詞語根の動作主」であることがわかる。[12] すなわち，図2を参照すれば，使役・使役再帰・制御再帰の始発動作主は第一動作主（主格名詞句）であるが，動詞語根の動作主は第二動作主（与格名詞句）となる。この点については受身だけが異なるが，受身も始発動作主（与格名詞句）と動詞語根の動作主（与格名詞句）が合体して現れたものとして見なせなくはない。このような観点をとれば，この四つの構文は図2の事態構造の上で統一的に捉えることができる。

ここで，行為の三つの局面，すなわちこれまでに見てきた行為の起点と終点の他に，行為の遂行（carrying out of an action）を加えて導入し（注6参照），これらの構文を分析する。つまり，それぞれの構文において（a）何が始発動作主か（行為の起点），(b) 何が着点・

(11) この制約がどこまで一般化できるかは今後の課題である。
(12) 柴谷（2004）では，使役にのみ実質的行為を行うものとして「動詞語根の動作主」を導入している。本稿では，すべての構文に適用できるものと考え，以下の分析に用いている。

被動者か（行為の終点），(c) 何が動詞語根の動作主か（行為の遂行），という観点から分析する。次を見られたい。

(12)（2b）の使役解釈の場合

（i）行為の起点：母親が子供（の口）におっぱいを入れてやること（始発動作主）

（ii）行為の終点：子供（の口）におっぱいが入ること（着点）

（iii）行為の遂行：子供が母親のおっぱいを口に咥えること（動詞語根の動作主）
（子供が母親のお乳を吸い込むところまで意味が拡張する）

・主格名詞句（母）＝始発動作主
・与格名詞句（子供）＝着点・動詞語根の動作主
・対格名詞句（おっぱい）＝移動物としての被動者
⇨ 第一動作主（始発動作主）≠第二動作主（動詞語根の動作主）

(13)（2b）の受身解釈の場合

（i）行為の起点：子供が母親のおっぱいを噛むこと（始発動作主）

（ii）行為の終点：母親がおっぱいを噛まれた状態であること（被動者）

（iii）行為の遂行：子供が母親のおっぱいを噛むこと（動詞語根の動作主）

・主格名詞句（母）＝被動者（または経験者）
・与格名詞句（子供）＝始発動作主・動詞語根の動作主
・対格名詞句（おっぱい）＝静止物としての被動者
⇨ 第一動作主（始発動作主）＝第二動作主（動詞語根の動作主）

(14)（5）（6）の使役再帰・制御再帰の場合

（i）行為の起点：ヨンイ／子供がその男／母親（のところ）に自分の体を寄せること（始発動作主）

（ii）行為の終点：その男／母親（の胸）にヨンイ／子供の体が密着した状態であること（着点），と同時に
ヨンイ／子供がその男／母親に抱かれた状態であること（被動者）

（iii）行為の遂行：その男／母親がヨンイ／子供の体を（胸に）抱くこと
（動詞語根の動作主）

・主格名詞句（ヨンイ／子供）＝始発動作主・被動者
・与格名詞句（その男／母親）＝着点・動詞語根の動作主
・対格名詞句（体）＝移動物としての被動者
（ただし制御再帰では，該当なし。）
⇨ 第一動作主（始発動作主）≠第二動作主（動詞語根の動作主）

これをまとめると，表3のようである。便宜上，対格名詞句の情報は反映しない。

構文	行為の起点 始発動作主	行為の終点 着点・被動者	行為の遂行 動詞語根の動作主
使役	主格名詞句	与格名詞句	与格名詞句
使役再帰	主格名詞句	与格名詞句・主格名詞句	与格名詞句
制御再帰	主格名詞句	与格名詞句・主格名詞句	与格名詞句
受身	与格名詞句	主格名詞句	与格名詞句

表3　使役と受身の間（2）

表3より，（i）何が始発動作主か（行為の起点），という観点からみると，使役・使役再帰・制御再帰ではともに主格名詞句が対応するが，受身では与格名詞句が対応し，異なる。一方，（ii）何が着点・被動者か（行為の終点）の観点からみると，中間にある使役再帰・制御再帰は二つに分かれる。着点の場合は使役と同様与格名詞句が対応するが，被動者の場合は受身と同様主格名詞句が対応する。しかしながら，（iii）何が動詞語根の動作主か（行為の遂行），という観点からみると，この四つの構文は一つにまとめ上げられ，共通の基盤をもつことになる。つまりこの四つの構文は，それぞれが同一の事態構造を共有しながら，動詞語根を基盤に成立する派生構文であることが認められる。

上記の（12）（14）の記述の際に，使役・使役再帰・制御再帰の与格名詞句は動詞語根の動作主であるとともに，着点でもあると述べた。それは次のように身体部分を顕在化して，そこに所格 *-ey* を用いても，与格 *-eykey* のときとほとんど変わらない意味を表すことからも支持されよう。（(15) のような使役構文については，鄭 1999，鄭 2006：112-117を参照。）

(15) emeni-ka　ai　ip-ey　cec-ul　mwul-*li*-ess-ta.（使役）
　母親-NOM　子供　口-LOC　おっぱい-ACC　咥える-CAUS-DEC
　‘母親が子供の口の中におっぱいを（入れてやって）咥えさせた。’
　（意味：母親が子供にお乳を飲ませた。）

(16) Yengi-ka　ku namca　phwum-ey　mom-ul　an-*ki*-ess-ta.（使役再帰）
　ヨンイ-NOM　その男　胸-LOC　体-ACC　抱く-cauREFL-PAST-DEC
　‘ヨンイがその男の胸に（自分の）体を（寄せて）抱かせた。’

(17) Yengi-ka　ku namca　phwum-ey　an-*ki*-ess-ta.（制御再帰）
　ヨンイ-NOM　その男　胸-LOC　抱く-conREFL-PAST-DEC
　‘ヨンイがその男の胸に（自分の体を寄せて）抱きつい（て抱かれ）た。’

以上の分析に基づき，使役と受身の間に見られる与格名詞句の機能的連続性を示すと，次のようである。動詞語根の動作主を共通項にした，着点と始発動作主の機能的相違が一方は使役構文，他方は受身構文を成立させている。すなわち，与格名詞句においては着点を始発動作主へと変えることによって動作主性を補強し，受身を成立させていることが読み取れるであろう。

(18) 与格名詞句の機能的連続性（着点から始発動作主へ：動作主性の強化）

使役／使役再帰　制御再帰　　受身

着点・動詞語根動作主 ＞（着点・）動詞語根動作主 ＞ 動詞語根動作主・始発動作主

2．4 非制御再帰

制御再帰とは区別される，もう一つの再帰的状況を取り上げよう。ここでは，以下のような意味的・統語的特徴をもつものを，中相の一つとして「非制御再帰」(non-controlled reflexive）と呼ぶ（鄭 1999)。受身を使役からの発達とみる立場にとって不利な情報は，制御再帰が，前節で取り上げたごく一部の動詞に（語彙的に）制限された非常に小さいサイズであるのに対して，非制御再帰は制御再帰より遥かにサイズが大きいという点である。そして最も重大な点は，非制御再帰をつくる動詞は大部分，対応する使役構文をもたないことである（4節参照)。しかしながら，意味的には最も被害受身の状況に近い。

(19)（ｉ）意味的特徴

行為の起点では自分（始発動作主）がひき起こした事態であるが，行為の終点では自分の身の上にその結果が残存する。この点では，制御再帰と共通する。また始発動作主の動作主性が背景化する点も，制御再帰と共通する。しかし，その事態が偶発的に起こった非意図的事態であることや，また始発動作主と動詞語根の動作主が一致していることは，制御再帰と異なり，後者はむしろ受身に似ている。第二主格名詞句は，身体部分でなくても可能になり，意味的には（あたかも）移動物のように捉えられる。

（ii）統語的特徴

能動文の主語（始発動作主）がそのまま主格名詞句の位置に居座ることができる。この点では受身と区別される。また移動物としての被動者が対格名詞句でなく，主格名詞句にコード化されるので，統語的には二重主格構文をとる。ただし，第一主格は所有格への交替も可能である。

もう一つ重要な特徴がある。次の例文を見られたい。(20a) は意図的文，(21a) は非意図的文である。両文の意味的相違は，身体部分が道具格か，所格か，によって左右されていることがわかる。この場合，どちらに接辞 *-i*/*-hi*/*-li*/*-ki* が付加でき，非制御再帰が作れるかというと，むしろ後者の非意図的な文である。つまり，非制御再帰は意図的な能動文と意味的には対応しないのである。また，統語的特徴としては (21b) のように二重主格構文の形をとることもわかる。ただし，第一主格は所有格への入れ替えも可能である。なお，第二主格名詞句（うんこ）は地面に固定した静止物というよりも，足の裏にくっ付く移動物のように捉えられ，また足も道具としてでなく，着点として理解される。

(20) a. ai-ka　pal-lo　ttong-ul　palp-ass-ta.（意図的）
子供-NOM　足-INST　うんこ-ACC　踏む-PAST-DEC
'子供が足でうんこを踏んだ。'

b. *ai-ka　pal-lo　(=ai pal-lo)　ttong-i
子供-NOM　足-INST（子供の足で）　うんこ-NOM
palp-*hi*-ess-ta.（非制御再帰）
踏む-nonconREFL-PAST-DEC
直訳：'子供が足でうんこが踏まれた／子供の足でうんこが踏まれた。'

(21) a. ai-ka　(kelekataka)　pal-ey　ttong-ul
子供-NOM　（歩いていく途中）　足-LOC　うんこ-ACC
palp-ass-ta.（非意図的）
踏む-PAST-DEC
直訳：'子供が（歩いていく途中）足にうんこを踏んだ。'
'子供が（歩いているときに）足にうんこを踏んでしまった。'

b. ai-ka　(kelekataka)　pal-ey　(=ai pal-ey)　ttong-i
子供-NOM　（歩いていく途中）　足-LOC（＝子供の足に）　うんこ-NOM
palp-*hi*-ess-ta.[13]（非制御再帰）
踏む-nonconREFL-PAST-DEC
直訳：'子供が（歩いていく途中）足にうんこが踏まれた／（歩いていく途中）子供の足にうんこが踏まれた。'
'子供が（歩いているときに）足にうんこがくっ付いてしまった。

(13) この文のように身体部分が所格をとる場合に限っては，*ai-eykey pal-ey ttong-i palp-hi-ess-ta.*（子供-DAT 足-LOC　うんこ-NOM　踏む-nonconREFL-PAST-DEC）のように，非制御再帰の与格構文も許される。

‘（歩いているときに）子供の足にうんこがくっ付いてしまった。’

ところが，李・任（1983：201-202）は（22）のような例を取り上げ，（22b）を受身（彼らの用語では「被動」）と判断した。（ただし注釈は筆者による。）そして，韓国語の受身は次のような特徴をもつと説明する。（ｉ）状況依存的（偶然の状況）である。（ii）脱行動性（deactivative）を表す。（iii）能動文と対応しない。つまり，韓国語学では一般に本稿でいう「非制御再帰」を受身と見なしているのである（任 1998，その他）。

（22）a．Chelswu-ka　mos-ey　os-ul　kel-ess-ta.（能動）
　　チョルス-NOM　釘-LOC　服-ACC　掛ける-PAST-DEC
　　‘チョルスが（壁の）釘に服を掛けた。’
　　b．Chelswu-ka　mos-ey　os-i　kel-*li*-ess-ta.（非制御再帰）
　　チョルス-NOM　釘-LOC　服-NOM　掛ける-nonconREFL-PAST-DEC
　　‘チョルスが（幅の狭いところを通っていくときに）釘に服が引っかかった。’

しかし（22b）も（21b）と同様に，（ｉ）始発動作主自身が引き起こした事態であること，（ii）行為の結果が自分（始発動作主）の身の上に残存し，自分が影響を被っていること，（iii）偶発的に起こった非意図的事態であること，（iv）背景化された始発動作主が第一主格の位置にそのまま居座ることができること，（ｖ）第二主格名詞句は移動物として捉えられていること，などの特徴から，受身でなく，「非制御再帰」と特徴付けることができる。したがって，（22b）が（22a）の能動文と意味的に対応しない理由は，非制御再帰がもつ意味特徴から説明できる。第一に，（22b）は非意図的事態であり，第二に，（22b）では行為の結果が自分の身の上に残存しなければならない，という再帰的状況が要求されるため，自分が着ている服でなければならないという制約が課されるからである。この制約は服が移動物として見なされる所以でもある。

ではなぜ，（21b）では身体部分が所格であるのに対して，（22b）では着ている服でなく，道具の釘が所格をとるか，という疑問が残る。実はこの問題は，非制御再帰にしばしば見られる図地反転の現象と関係がある。これは大変興味深い現象であるが，非制御再帰では（その状況さえ思い浮かべられれば）所格名詞句と第二主格名詞句が比較的自由に交替可能である。したがって，（22b）も（23）のように言い換えが可能である。（22b）では移動物の服（チョルスが着ている服）が主格をとり，静止物の釘（机や壁などに刺さり，固定された道具）が所格をとっているが，[14]（23）ではヨンイの身体の上にある服が所格をとり，固定され

（14）Lee（1993：277-280）は，所格の道具は道具としてでなく場所として解釈されると説明している。

た道具の釘が主格となっている。よって，移動物としての服と静止物としての道具の間に図地反転が起こっている。しかし，客観的な状況から見ると，両文とも狭いところを通るときに，どこかに刺さっていた釘に着ていた服が引っかかった状況であることには変わりがない。

(23) Chelswu-ka os-ey (=Chelswu os-ey) mos-i
チョルス-NOM 服-LOC（＝チョルスの服に） 釘-NOM
kel-*li*-ess-ta.（非制御再帰）
掛ける-nonconREFL-PAST-DEC
'チョルスが（幅の狭いところを通っていくときに）服に釘が引っかかった。'
'（幅の狭いところを通っていくときに）チョルスの服に釘が引っかかった。'

今度は固定された静止物の道具でなく，手にもって自由に使える道具の場合を見てみよう。(24) は，両文とも縫い物をしているときにうっかり自分の指を自ら刺してしまった状況である。この場合の針と指は客観的には両方とも移動物として見ることができよう。しかし実際の状況において，もし針を握っている側の指とそうでない側の指を比べてみると，後者の指は針と異なり，静止物として見ることも十分あり得るであろう。(24a) はこのように理解される文である。一方，(24b) のように針が所格のときは，着点として捉えられているのか，道具として捉えられているのかが曖昧である。前者ならば，針に指が接触し刺さったためであるが，後者ならば，針に刺されたという意味になるのであろう。

(24) a. Yengi-ka sonkalak-ey(=Yengi sonkalak-ey) panul-i
ヨンイ-NOM 指-LOC （＝ヨンイの指に） 針-NOM
ccil-*li*-ess-ta.[15]（非制御再帰）
刺す-nonconREFL-PAST-DEC
'ヨンイが（縫い物をしているときに）指に針が刺さった。'
'（縫い物をしているときに）ヨンイの指に針が刺さった。'

b. Yengi-ka panul-ey sonkalak-i(=Yengi sonkalak-i)
ヨンイ-NOM 針-LOC 指-NOM（＝ヨンイの指が）

(15) 風間（2005）は，ウィルタ語（ツングース諸語）では使役とも受身ともみなすことができないものとして「再帰的非意図的用法」があるとし，次の例をあげている。韓国語と同様の状況が窺える。ただし韓国語のように，二重主格構文（または注13のような与格構文）が可能か，図地反転による格交替も可能か，などについては不明である。
ŋaala-bi kitaan-ji goči kuk-pauč-či-ni（池上 1997p. 114）（下線は筆者）
私の手に 針が また 刺さった（-či は完了，-ni は3sg. 主）

ccil-*li*-ess-ta.（非制御再帰）
刺す-nonconREFL-PAST-DEC
‘ヨンイが（縫い物をしているときに）指が針に当たって刺さった／針に刺された。’‘（縫い物をしているときに）ヨンイの指が針に当たって刺さった／針に刺された。’

しかし，手にもって自由に使える道具でも，次のように身体への影響力が極めて大きい場合は，道具と身体部分との間に図地反転は起こらない。この場合の道具は所格であっても，着点として解釈されることはなく，道具本来の機能を担っているように解釈される。とはいえ，非制御再帰では（25c）のように，道具を道具格で標示することはできない。

(25) a. Yengi-ka (mwu-lul ssel-taka) khal-ey sonkalak-i
ヨンイ-NOM（大根を切る途中） 包丁-LOC 指-NOM
cal-*li*-ess-ta.（非制御再帰）
切る-nonconREFL-PAST-DEC
直訳：‘ヨンイが（大根を切っている途中）包丁に指が切られた。’
‘ヨンイが（大根を切っているとき，うっかり）包丁で指を切ってしまった。’

b. *Yengi-ka (mwu-lul ssel-taka) sonkalak-ey khal-i
ヨンイ-NOM（大根を切る途中） 指-LOC 包丁-NOM
cal-*li*-ess-ta.（非制御再帰）
切る-nonconREFL-PAST-DEC
直訳：‘ヨンイが（大根を切っている途中）指に包丁が切られた。’

c. *Yengi-ka (mwu-lul ssel-taka) khal-lo sonkalak-i
ヨンイ-NOM（大根を切る途中） 包丁-INST 指-NOM
cal-*li*-ess-ta.（非制御再帰）
切る-nonconREFL-PAST-DEC
直訳：‘ヨンイが（大根を切っている途中）包丁で指が切られた。’

このことと，（25a）が意味的に受身により近いと理解されることとは無関係ではないだろう。次を見るとわかるように，再帰的状況さえ解除されれば，自分がもっている道具でなくなり，他の誰かがもっていた道具として理解され，受身解釈を受けることになるのである。しかしこの場合でさえも，道具に道具格を与えることは許されない。

(26) a. Yengi-ka khal-ey ccil-*li*-e cwuk-ess-ta.（受身）
ヨンイ-NOM 包丁-LOC 刺す-PASS 死ぬ-PAST-DEC
'ヨンイが（誰かの手にもっていた）包丁に刺されて，死んだ。'

b. *Yengi-ka khal-lo ccil-*li*-e cwuk-ess-ta.（受身）
ヨンイ-NOM 包丁-INST 刺す-PASS 死ぬ-PAST-DEC
'ヨンイが（誰かの手にもっていた）包丁に刺されて，死んだ。'

以上，非制御再帰では身体部分と道具（移動物と静止物）の間に「行為の展開」においてその優位性が定まらず，しばしば図地反転が起こり，その結果格交替現象が見られることがわかる。しかし，身体部分に極めて大きな影響力をもたらす場合の道具は地図反転が起こらない。そのときの道具は所格のみ対応するが，意味機能としては着点ではなく，道具として理解されると考えられる。表4を見られたい。中間の矢印は傾斜を示す。

道具の種類	分離不可能な道具	分離可能で固定された道具	分離可能で固定されていない道具	
	Inalienable inst.	Alienable-Fixed inst.	Alienable-Moving inst.	
例	手，足など	釘（固定されている）	針	包丁
格標示	所格／主格	所格／主格	所格／主格	所格
意味機能	着点	←	→	道具

表4　非制御再帰における所格の道具と格交替

ここで，移動物の被動者の情報を反映して，非制御再帰を表3の中に位置づけてみると，次のようである。ただし，非制御再帰の所有格構文はこの表に反映していない。

構文	行為の起点 始発動作主	行為の終点 着点・被動者	移動物 被動者	行為の遂行 動詞語根の動作主
使役	主格名詞句	与格名詞句	対格名詞句	与格名詞句
使役再帰	主格名詞句	与格・主格名詞句	対格名詞句	与格名詞句
制御再帰	主格名詞句	与格・主格名詞句	（主格名詞句）	与格名詞句
非制御再帰	第一主格	所格＝第一主格	第二主格	第一主格（21b）
	第一主格	所格≠第一主格	第二主格	第一主格（22b）
受身	与格名詞句	主格＝対格名詞句		与格名詞句

表5　使役と受身の間（3）

まず移動物の被動者についていうと，それが身体部分である場合，使役・使役再帰では対格名詞句が対応する。一方，制御再帰では始発動作主から身体（部分）を言語的に分離する

ことができないため，括弧付きの主格名詞句で示した。これに対して，非制御再帰では，通常，第二主格名詞句が移動物の被動者に対応するが，図地反転の影響から，必ずしも身体部分が移動物であるとは限らない。また，行為の遂行の面でも，他の四つの構文と異なり，非制御再帰だけが異質的な存在である。動詞語根の動作主を第一主格名詞句が担っているからである。

つまり，非制御再帰は再帰的状況という意味的な連続性こそあるが，動詞語根の動作主のコード化においては，上記の構文の中で最も異質な構文である。しかし意味的には最も被害受身に近づいていることもわかる。では，非制御再帰は受身，とりわけ被害受身とはどのように繋がるのだろうか。それについては4．4節で示す。

3．関連構文の範囲と接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能

2節では，使役と受身の間には使役再帰だけでなく，制御再帰や非制御再帰も存在することが確認された。本節では，その他にも多様な構文が接辞 *-i/-hi/-li/-ki* に結びついていることを見ていき，その関連構文の範囲を定め，その中でより安定的・生産的に作れるヴォイスは何か，を考察する。そのあとに，構文間のネットワークを提示し，これらの構文を包括できるような接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能を提案する。

3．1 一人称の自発と可能

まず，ここでは接辞 *-i/-hi/-li/-ki* が表す自発・可能の範疇を明らかにし，人称（および時制）との関連を浮き彫りにする。

伝統文法学者の崔鉉培（1994［1937］：422-423）は，韓国語の受身には「利害被動」「可能的被動」「自然的被動」の三種類があるとし，それぞれを次のような例文で示した。[16] すなわち，彼は可能や自発を受身の下位範疇として分類したのである。そして，受身の主語は常に有情物（人格化したもの）であるのに対して，自発と可能の主語は常に無情物（非人格化したもの）であると特徴付けている。しかし本稿では，自発と可能を以下に述べるような統語的・意味的な理由により，受身とは区別する。

(27) a．ku salam-i　totwuknom-eykey　cap-*hi*-ess-so.（利害被動）
その人-NOM　泥棒の奴-DAT　捕まえる-PASS-PAST-DEC.HON
‘その人が泥棒のやつに捕まったのです／捕まえられたのです。’

(16) この分類は松下大三郎（1930）と同じであるが，韓国語学では現在も影響力をもっているように思われる。韓国語学における *-i/-hi/-li/-ki*＝受身という見方の定着はこの分類と無関係ではないであろう。

b．ilen　tech-ey-to　pem-i　cap-*hi*-na?（可能的被動）
こんな　罠-LOC-も　トラ-NOM　捕まえる-POTEN-INT
‘こんな罠にもトラが捕まえられるのかい。’（捕まえられないだろう，という意味）

c．onul-un　kkwueng-un　han mali-to　ani　cap-*hi*-ko,[17]
今日-TOP　雉-TOP　一匹-も　Neg.　捕まえる-POTEN-and,
thokki-man　cakkwu　cap-*hi*-n-ta.（自然的被動）
ウサギ-ばかり　頻繁に　捕まえる-SPON-PRES-DEC
‘今日は，雉は一匹も捕まえられず，ウサギばかりがしきりに捕まるのだ。’

その前にまず，自発や可能が最も安定的に作れる場合，言い換えれば，自発と可能の意味が安定して生じるときはいかなる条件が整った場合であるか，を考えてみよう。結論からいうと，現在時制をとり，話者の直接的な経験を語るときには，受身でなく，自発や可能の意味が表出される。実際（27b）（27c）を見ると，一人称（疑問文では二人称）にとって当該の事態が達成されたかどうか，ということを，（27c）では話者が自らの身体を通して感じた直接経験を根拠に，臨場感ある述べ方で話していることがわかる。[18] この場合一人称は，行為の起点に立つ始発動作主であるとともに，行為を遂行する動詞語根の動作主であり（この点では受身に似ている），また同時に，行為の終点においては自分の意図したこととは無関係なところで当該事態が達成され（またはされず），そのことによってその事態の経験者となる（この点では受身と異なる）という特徴をもつ。つまり（27c）では，自分が意図していた雉を捕まえることに失敗し（ここから「捕まえることができず」という可能の意味が出てくる），意図しなかったウサギがなぜかしきりに捕まったことにより，非意図の自発の意味が出てくるのである。[19] このような特徴は（27a）の「利害被動」（すなわち，被害受身）には現れない。

したがって一人称は，次のように与格主語として文中に導入することもできる。[20] ただし，

(17) 崔鉉培（1994［1937］）はこれも「自然的被動」であるとしたが，ここでは「可能」と解釈した。
(18) Lee（1976：287）はこのような自発・可能の意味を，話者が経験者であるという点から心理動詞と同列に特徴付けている。
(19) 崔鉉培（1994［1937］）も，「意図したことでもないのに，おのずと雉は捕まえることができず，ウサギだけ捕まえることになる（p.422）」という意味を表す「自然的被動」であると解釈している。
(20) この状況は，Langacker（1990）の「主観的把握」（subjective construal）対「客観的把握」（objective construal）の対立を思い起こさせる。Langacker（1990：20-21）によれば，後者では認知主体（cognizing subject）である一人称が言語化されるが，前者では言語化されない。池上（2006：21-22）の解釈によれば，「主観的把握」とは，認知主体の話者が言語化の対象とする事態の内に自らの身を置くというスタンスであり，「客観的把握」とは，認知主体の話者が言語化の対象とする事態の外に自らの身を置くというスタンスである。したがって「主観的把握」は，認知主体の話者が言語化の対象とする事態の中に臨場して，客体と融合し，自らの身体を通して直接経験するという様相で捉えるものであると説明される。これについては，中村（2006）のインタラクションの認知モード（I モード）と脱主体化の認知モード（D モード）も参照されたい。

一人称が言語化された場合には，他の人と違って私には，という対照の意味が加わる。[21]

(28) a. na-hanthey-nun cwuy-ka comchelem cal an
私-DAT-TOP ネズミ-NOM なかなか よく Neg.
cap-*hi*-n-ta.（可能）
捕まえる-POTEN-DEC
'私には，ネズミがなかなか捕まえられないのだ。'

b. na-hanthey-nun kkwueng-un han mali-to an cap-*hi*-ko,
私-DAT-TOP 雉-TOP 一匹-も Neg. 捕まえる-POTEN-and,
thokki-man cakkwu cap-*hi*-n-ta.（可能／自発）
ウサギ-ばかり 頻繁に 捕まえる-SPON-PRES-DEC
'私には，雉は一匹も捕まえられず，ウサギばかりがしきにり捕まるのだ。'

次に，自発と可能の相違点を見てみよう。上記の例を見ると，自発は一人称の経験者において現実に達成された事態を表すが，可能は主として否定表現が用いられ，達成されなかった非現実の事態を表すところに成立する，といえる。[22]

とりあえずここまでを表6のようにまとめておく。ただし自発と可能は，表6のような条件においてのみ見られる，ということを主張したいわけではない（以下も参照）。

	時制	現実性	与格主語	始発動作主・動詞語根動作主
自発	現在形	現実	可	一人称の与格主語（経験者）
可能	現在形	非現実	可	一人称の与格主語（経験者）

表6　自発と可能（最も生産的に作れる場合）

(21) 一人称の与格主語は主格主語への入れ替えもできる。ただし，そのときは取り立ての意味を強く帯びるようになり，対照の意味がより有標的になる。また主格主語になった場合は，非制御再帰と同様二重主格構文になり，両者の強い構文的な接近が見られる。他方，非制御再帰もある条件のもとでは与格構文も許されるので（注13），両者の近接性は非意図的という意味だけに限らないことがわかる。

(22) 自発・可能と否定の関係について，本稿の考え方は（表7参照），寺村（1982），Shibatani（1985），ヤコブセン（1989）など，従来よく知られた考え方と若干異なる点がある。寺村（1982：276）と Shibatani（1985）によれば，多くの言語において可能は自発の否定を経て現れる。すなわち，自然に起こる傾向にあるものが否定されると，自然には起こりにくいということから不可能の意味を帯びるとされる。ヤコブセン（1989：240）も「いくら押しても窓が開かない」という否定の自発表現から可能が成り立つことを指摘している。本稿で注目した現在時制・一人称と自発・可能の関連については，その重要性に比べるとあまりこれまでに取り上げられなかったように思われる。しかし，日本語でも「いくら押しても，私には，窓が開かない」のように，一人称を表現することもでき，「見える」「聞こえる」などの視覚・聴覚動詞や「思われる」「思い出される」などの認識動詞も一人称の自発であることを考えると，自発と可能の意味が安定的に生じる場合と現在時制の一人称との関係は，より普遍的な現象である可能性がある。

ここで，一人称の与格主語が言語化されず，最小限の表現になった場合に，唯一項として現れる主格名詞句に焦点を当ててみよう。上記の文はネズミやウサギのような有生物が主格名詞句に表れた例であるが，ここでは無生物が主格名詞句に表れた場合を取り上げ，自発と可能の意味が実際どのように生じてくるかを考察しよう。次の例を見られたい。

(29) a. amwuli mek-ulyeko hayto pap-i cal an
いくら食べようと思っても ご飯-NOM よく Neg.
mek-*hi*-n-ta.（一人称可能）
食べる-POTEN-PRES-DEC
'いくら食べようと思っても（なぜか）ご飯が（のどを通らず）よく食べられないんだ。'

b. mwul-ey mal-a-mek-e-po-ni, pap-i cello
水-LOC 混ぜる-食べる-みる-と，ご飯-NOM 勝手に
mek-*hi*-tela.（一人称自発）
食べる-SPON-MOD
'水に（ご飯を入れて）混ぜて食べてみたら，（なぜか）ご飯が勝手に（のどを通って）食べられたのよ。'

まず，行為の起点から見よう。両文とも，行為の起点に立つ始発動作主は意図をもってその事態に臨んでいる状況が覗える。（この状況は，偶発的に事態が起こってしまう非制御再帰とは決定的に異なる点である。）しかし実際に行為の終点に立ってみれば，当該の事態の成立は自分の意図と無関係なところで勝手に達成された（またはされなかった）ことであり，それを身をもって経験したことを表す。では，その中間段階（行為の遂行）では事態がどのように運ばれたのだろうか。動詞語根の動作主がご飯を飲み込むと，普通ならば（意図通りになんら障害もなく）すらすらとご飯がのどを通っていくはずであろうという前提がある。もしこの前提通りに事態が運ばれたならば，普通は他動詞の「食べる」を使うであろう。しかし，たとえば満腹状態であるとか，食欲がないとか，あるいはご飯がまずい，などの他の要因による障害が発生すれば，自分の意図通りには事態が運ばれない状況もあり得るであろう。この場合，自分の意図は失敗に終わり，当該の事態も達成されなくなり，そこから不可能の意味が生じる。*Amwuli yeleto an yel-li-n-ta.*（いくら押しても開かない，（私には）開くことができない。）もそのような例である。これに対して，他の要因による障害があってもそれをのり越えたことによって，事態が達成されることもあり得るであろう。この場合は，肯定の可能の意味が生じるようになる。(29b) と同様に，*Himkkes yeleponi yel-li-tela.*（力

いっぱい押してみたら，（私には）開けられたのよ。）もこのような例である。[23]

では，自発の意味はどのように生じるのだろうか。本稿ではこのように考える。始発動作主（一人称）は意図をもってその事態に臨むが，自分の意図とは無関係なところで勝手に当該の事態が運ばれてしまい，それを身をもって経験することとなる。このことから，その事態の達成は自分ではどのようなものからもたらされたか特定はできないが，不明確な何らかの要因（超自然力もあり得るだろう）が作用しているはずだ，という認識が生まれると考えられる。「なぜか」「おのずと」「勝手に」のような副詞句はおそらくこのような認識の言語的コード化であろうと考えられる。

この考え方は，Shibatani（2006）のヴォイス・パラメータと多少異なる点があるので，ここで触れておきたい。Shibatani（2006：222）によれば，行為が意志的にもたらされたか（意志的文），無意志的にもたらされたか（自発文），という点において動作主の本性を問題にし，自発を「行為の起源」パラメータに属するものと分類している（1節参照）。しかし本稿では，無意志的という条件だけでは非制御再帰との区別が付かなくなるので（cf. Shibatani 2006：225），それに加えて自分でない他の要因（人間以外）の関与があるかどうか，というもの（正確には，そのような認識があること）こそが，自発と可能では重要であると提案する。つまり，重要な点は，動作主の本性（あり方）が問題視されるのは行為の起点と遂行のときだけであり，行為の終点に立ってみれば，当該の事態を達成させた（またはさせなかった）「実質の起源」は別にあって，それが自分でない他の要因であると認識されることである。こう考えると，自発と可能も行為の起源（自分と自分以外のもの）を言及しつつ「行為の展開」を問題にする中相範疇である，という提案もできそうである（「行為の展開」のパラメータは1節参照）。[24] このような本稿の考え方は表7のようにまとめておく。

話を戻して，今度は主格名詞句の意味性質に焦点を当ててみよう。(29) の日本語訳に見られるように，ここではご飯がのどを通っていく移動物のように捉えられていることが窺える。実際 (30) のように移動動詞を用いても，意味的には (29) とほぼ同じである。このように主格名詞句の移動物への拘りは，非制御再帰から引き続くものであるが，このことと kkayta‘割る’，pwuswuta‘壊す’のような典型的な状態変化他動詞にはそもそも接辞 *-i/-hi/-li/-ki* が付加できないこととは，無関係でないように思われる。[25] (31) を参照されたい。

(23) このタイプは，日本語学では「実現系可能」「意図成就」などと呼ばれている（渋谷 1993，川村 2005）。
(24) 寺村（1982）も可能をヴォイスの一現象として位置付け可能態と呼んでいる。日本語において可能態の中心的な意味は「何々しようと思えば，その実現についてさまたげるものはない（p. 269）」であるとされる。本稿では，その妨げを外的な要因，すなわち自分でない他の要因と見なした（渋谷1993：30-33の「可能の条件スケール」も参照）。妨げがあってもそれをのり越えたところに肯定の可能の意味が出てき，失敗すれば不可能の意味が出てくるという点は，日本語も韓国語と一致するように思われる。

行為の起点 始発動作主	行為の遂行 動詞語根動作主・被動者	行為の終点 被動者・経験者＝始発動作主
意図をもって臨む	実際行為を実行すると	事態が達成される
――――	［すらすらと事態が運ばれる］	――――▶ 意図的文
――――▶×	［（自分ではない）他の要因が関与し障害がある］	……×……▶ 不可能 ――――▶ 可能
――――▶×	［（自分ではない）他の不明確な要因が関与しすらすらと事態が運ばれる］	――――▶ 自発

表7　一人称の自発と可能の意味生成メカニズム

(30) a. amwuli mek-ulyeko hayto　pap-i　cal　an
いくら食べようと思っても　ご飯-NOM　よく　Neg.
nem-e-ka-n-ta.
越える-行く-PRES-DEC
直訳：‘いくら食べようと思ってもご飯が（のどを）越えていかないんだ。’

b. mwul-ey　mal-a-mek-e-po-ni,　pap-i　cello　nem-e-ka-tela.
水-LOC　入れる-食べる-みる-と，　ご飯-NOM　勝手に　越える-行く-MOD
直訳：‘水に入れて食べてみたら，ご飯が勝手に（のどを）越えていったのよ。’

(31) a. *amwuli hayto　tol-i　cal　an　pwuswu-*i*-n-ta.
いくらやっても　石-NOM　よく　Neg.　壊す-POTEN-PRES-DEC
意図：‘いくらやっても石が粉々にできないのだ。’

b. *hanpen hay-po-ni,　tol-i　cello　pwuswu-*i*-tela.
一度-する-みる-と，　石-NOM　勝手に　壊す-SPON-MOD
意図：‘一度やってみたら，石が勝手に壊れたのよ。’

以上を，表8では非制御再帰との共通点・相違点の観点からまとめている。次の表9では，2節と同様に，構文間の連続・不連続の関係が捉えられるようにまとめた。ただし，一人称の与格主語は取り外し可能なので，括弧付きで示した。注21も参照されたい。

(25) ヤコブセン（1989）は，日本語の「音楽が聞こえる」「黒板が見える」のような文に対して，これらは非意図的な出来事であり，また意図的な行為の結果であるとした上で，「「音楽」や「黒板」などに実際の変化が起こらないにしても，それらが経験者の視覚，または聴覚領域に入るという，やはり一種の変化を表すのである（p. 222）」としている。本稿の考察からみると，その変化とは，視覚映像または聴覚映像が目や耳に届く，いわば「映像の移動」であると考えられる。

共通点 ①背景化された始発動作主＝動詞語根動作主が文頭の主語の位置にくることができる。
②始発動作主＝動詞語根動作主は，同時にその事態を身をもって直接経験する経験者でもある。
③移動物として理解されうるものが，主として主格名詞句にコード化される。
④非意図的な事態である。

相違点 ①非制御再帰は過去時制をとり三人称主語も可能であるが，一人称の自発・可能は現在時制が主流である。
②自発・可能は非制御再帰のように偶発的に起こった非意図的事象ではない。
③自分が引き起こした事態により自分が影響を被るという意味合いも現れない。
④自発・可能は行為の起点では意図をもってその事態に臨むが，行為の終点では当該事態の成立は自分でない他の要因が関与し，自分と無関係にその事態がすらすらと達成された（または，されなかった）ことを表す。

表8　非制御再帰と一人称の自発・可能の比較

	行為の起点 始発動作主	行為の終点 着点・被動者 経験者	移動物 被動者	行為の遂行 動詞語根の動作主
被害受身	与格名詞句	主格名詞句		与格名詞句
制御再帰	第一主格	所格＝第一主格	第二主格	第一主格（21b）
	第一主格	所格≠第一主格	第二主格	第一主格（22b）
自発・可能	（一人称・与格）	（一人称・与格）	主格名詞句	（一人称・与格）

表9　被害受身・制御再帰・一人称の自発と可能の連続・不連続性

この節では，一人称の自発と可能を中心に見てきたが，一人称から開放された自発や可能も存在しないわけではない。それについては，次節を見られたい。

3．2 関連構文の範囲，ネットワーク，より生産的なヴォイス

では，どれほどの多様な構文が一つの動詞形態素に結びつき，広がりを見せているのだろうか。とりあえず（32）のように動詞を分類し，それぞれの代表動詞を一つずつ選び接辞 *-i*/*-hi*/*-li*/*-ki* を付加してみることにする。動詞リストは，4節を参照されたい。

（32）動詞分類（1）

a．他動詞 ―― （対応する）使役がある：他動詞 A
　　 ＼ （対応する）使役がない：他動詞 B

b．自動詞
- 動作動詞（active verbs）
  - 使役がある：自動詞Ａ１
  - 使役がない：自動詞Ａ２
- 非動作動詞（inactive verbs）
  - 使役がある：自動詞Ｂ１
  - 使役がない：自動詞Ｂ２

３．２．１ 他動詞Ａ：*mwulta* の場合

（33） ａ．emeni-ka　ai-eykey　cec-ul
母親-NOM　子供-DAT　おっぱい-ACC
mwul-*li*-ess-ta.（使役／受身１）（＝２b）
噛む-CAUS/PASS-DEC
‘母親が子供（の口の中）におっぱいを（入れてやって）咥えさせた。’
（母親が子供にお乳を飲ませた。）
‘母親が子供におっぱいを噛まれた。’

ｂ．emeni-ka　ai-eykey　cec-i
母親-NOM　子供-DAT　おっぱい-NOM
mwul-*li*-ess-ta.（＊使役／二重主格受身）
噛む-PASS-PAST-DEC
直訳：‘母親が子供におっぱいが噛まれた。’

ｃ．ai　(ip-ey/)　-eykey　wuywupyeng-i
子供　（口-LOC／）　-DAT　牛乳のビン-NOM
mwul-*li*-e-iss-ess-ta.（結果受身１）
噛む-PASS-RESULT-PAST-DEC
‘（誰かが入れておいた結果）子供（の口）に哺乳瓶が咥えられていたよ。’

ｄ．*wuyupyeng-i　ai-eykey/ey uyhay　mwul-*li*-ess-ta.（＊受身２）
牛乳のビン-NOM　子供-DAT/by　噛む-PASS-PAST-DEC
‘牛乳のビンが子供に噛まれた／子供によって咥えられた。’

ｅ．*nwukunka-ey uyhay　wuyupyeng-i　mwul-*li*-ess-ta.（＊受身２）
誰か-by　牛乳のビン-NOM　噛む-PASS-PAST-DEC
‘誰かによって哺乳瓶が噛まれた／咥えられた。’

（34） ａ．amwuli hay-po-ato　ceskalak-i　cal　an
いくらやってみても　割り箸-NOM　よく　Neg.
mwul-*li*-n-ta.（可能：一人称）
噛む-POTEN-PRES-DEC

‘いくらやってみても割り箸がなかなか（口に）咥えられない。’

b．na-hanthey-nun ceskalak-i cal an mwul-*li*-n-ta.（可能：一人称）
私-DAT-TOP 割り箸-NOM よく Neg. 噛む-POTEN-PRES-DEC
‘私には，（やってみても）割り箸がなかなか（口に）咥えられないよ。’

c．#i ceskalak-un mwul-*li*-n-ta.（*自動詞：潜在的属性）
この 割り箸-TOP 噛む-POTEN-PRES-DEC（??自発・可能：不特定多数）
‘この割り箸は咥えられる（咥えることができる）（ものだ）。’
‘この割り箸は（誰（の口）にでも）咥えられる（ものだ）’

Mwulta‘噛む’，‘咥える’には三種類の受身と一人称の自発・可能が対応できる。受身にはまず，使役と構文を共有する，すなわち使役構文に依拠している受身（被害受身。便宜上，受身1とする）がある。次に，主語の身体部分が主格となっている受身（「二重主格受身」と呼ぶ）がある。[26]「二重主格受身」は，非制御再帰と同様に二重主格構文の形をとっているが，始発動作主と動詞語根の動作主が一致していることと，それを与格名詞句が担っていること，そして第二主格が移動物の被動者としては解釈されないことから，非制御再帰ではなく，受身であると判断される。ただし受身1と異なり，主格のままでは使役解釈はできない。

三番目は，結果受身である。[27]これは（33c）のように，結果状態を表す *-e iss* との共起によって成立する。この文の与格名詞句（子供）は，実は動詞語根の動動作主であるが，行為終了後の結果状態に焦点が当てられているため，その動作主性は背景化され見えなくなっている。したがって，子供は動作主（第二動作主）というよりも，着点・被動者として理解されてしまう。つまり，哺乳瓶が子供の口に咥えられているのは誰か（始発動作主）が子供の口に入れておいた結果である，と解釈され，不特定の動作主が含意されるのである。このように使役構文に依拠しているタイプを「結果受身1」と呼ぶことにする。最後の（33d）（33e）は，使役構文に依拠しないタイプの受身（受身2とする）であるが，これは結果受身1と異なり，不自然である。

自発・可能においては，一人称の可能（34a）と一人称が与格主語にコード化された（34b）が成立する。ただし，運動会などで両手を使わずに，バーに紐で吊した割り箸を誰がより早く口に咥えられるか，という大会を行っている状況として想像されたい。そのときの割り箸は，勝手に動き回る移動物のように捉えられることが理解されよう。つまり，

(26)「二重主格受身」は，李・任（1983：204-205），李（1991），Washio（1995：223-249），鷲尾（1997：52-60）などで議論され，その成立についてはそれぞれの立場から分析されている。
(27) 結果受身については，Kim（1991），Yoen（1994：133-134）を参照されたい。

意図をもってその事態に臨めば，普通は思うとおりにすらすらとその事態が達成されるはずであるのが，他の要因（ここでは割り箸の勝手に動き回る性質）のためにうまく事態が運ばれず，達成されなかったという状況である。最後の（34c）は，もし自分の経験を相手と共有するために「あなたもやってみなさい」という気持ちで発言したものであれば，一人称の可能の域を超えないので使える。しかし，不特定多数の自発・可能や潜在的属性を表す自動詞文としては不自然である。

3．2．2 他動詞 B：*yelta* の場合

(35) a．mwun-i emeni- {?ey uyhay/*eykey} yel-*li*-ess-ta.（?*受身２）
戸-NOM 母親- {によって/に} 開ける-PASS-PAST-DEC
直訳：‘戸が母親 {によって／に} 開けられた。’

b．nwukunka-ey uyhay kapcaki mwun-i yel-*li*-ess-ta.（受身２）
誰か-によって いきなり 戸-NOM 開ける-PASS-PAST-DEC
‘（誰かわからないが）誰かによって，いきなり戸が開けられた。’

c．mwun-i yel-*li*-e-iss-ta.（自発／結果受身２）
戸-NOM 開ける-SPON/PASS-RESULT-DEC
‘（なぜか）戸が開いている／（誰かが開けた結果）戸が開けられている。’

d．palam-ey mwun-i yel-*li*-ess-ta.（自動詞？受身？）
風-LOC 戸-NOM 開ける-INTR/PASS-PAST-DEC
‘風で戸が開いた／風に戸が開けられた。’

(36) a．(na-hanthey-nun) mwun-i cal an yel-*li*-n-ta.（可能：一人称）
(私-DAT-TOP) 戸-NOM よく Neg. 開ける-POTEN-PRES-DEC
‘（私には）戸がなかなか開かない（開くことができない）。’

b．cecello mwun-i yel-*li*-ess-ta.（自発）
おのずと 戸-NOM 開ける-SPON-PAST-DEC
‘おのずと戸が開いた’

c．i mwun-un yel-*li*-nun mwun-i-ko, ce mwun-un
この 戸-TOP 開く-POTEN-REL.PRES 戸-DEC-and あの戸-TOP
an yel-*li*-nun mwun-ita.（自発・可能：不特定多数）
Neg. 開ける-POTEN-REL.PRES 戸-DEC （自動詞：潜在的属性）
‘この戸は（誰がやっても）開く（開くことができる）戸であり，あの戸は（誰がやっても）開かない（開くことができない）戸である。’
‘この戸は開くものだが，あの戸は開かないものだ。’

この動詞には対応する使役がない（(3b) 参照)。したがって受身1も存在しない。しかしながら，二種類の受身 —— 受身2と結果受身2 —— と多様な自発・可能が成立する。まず受身2では，動作主が特定の人物の場合は不自然であるが，不特定の人物の場合は自然である。ここでは動作主マーカーも与格は不自然であり，普通 *-ey uyhay*‘によって’が用いられる。[28] このことから使役構文に依拠しない構文，すなわち受身2が成立することがわかる。

(35c) は曖昧である。結果状態が，特定できない不明確な要因によって得られていると理解される自発と，誰かが開けておいた結果開いている状態があると理解される受身の，二通りの解釈ができる。後者の場合は，動作主を含意し，しかも (33c) とは統語的に異なるタイプの結果受身（結果受身2とする）を成立させている。また (35d) のように，自動詞か受身かが判断できないものもある。外的要因としての「風」が，当該事象を引き起こした単なる原因に過ぎないのか，力動性をもった動作主的な存在なのかが，不確実 (vague) だからである (鄭 2004)。日本語ならば，注釈のように「風で」となるか「風に」となるかで，自動詞か受身かに分かれるところである。(韓国語で道具格が使えないことは2.4節を参照。)

自発・可能の場合は，一人称はもちろん，一人称から開放された自発・可能，とりわけ (36c) のように不特定多数の自発・可能が成立する。さらには潜在的属性を表す自動詞文も成立する。(36c) の二つの解釈の関係は次のように考えられる。すなわち，誰がやっても開く（開くことができる），または開かない（開くことができない）ということから，すなわち繰り返し同じ結果が得られることから，その一般化によって，当該事態の達成は対象物そのものにそのような性質が潜在的にあるからだ，と理解されるようになる。つまり，主格名詞句に対する属性解釈が生まれ，成立したと考えられる。このように考えると，*I khamela-nun sacin-i cal ccik-hi-n-ta.*（このカメラは写真がよく撮れる）や *I chayk-un cal phal-li-n-ta.*（この本はよく売れる）のように，英語の中間構文に対応するような構文の成立も，説明できるようになる。すなわち，一人称から，不特定多数の自発・可能を経て，潜在的属性の自動詞文への展開としてみることができる。[29] この考え方は，副詞 *cal* が複数回数（量的）と事態遂行のプロセスの良さ（質的）の両方の解釈を許すことからも支持される。

(28) 本稿の受身1と受身2の区別は，受身が使役構文に依拠しているかどうか，によるものであるが，結果的には，金水 (1993) のいう日本語固有の受身と非固有の受身の分類に対応できる。ごく単純化していうと，日本語固有の受身は有情物主語で，動作主マーカーも与格が用いられるが，非固有の受身は西洋語の影響により19世紀半ばごろ増加したもので，動作主マーカーは「によって」が用いられる。また，主として無情物主語の受身であるという特徴がある。

3.2.3 自動詞A1：*ketta* の場合

(37) a. ai-ka　kel-ess-ta.（自動詞）
　　子供-NOM　歩く-PAST-DEC　‘子供が歩いた。’
　b. emeni-ka　ai-lul　kel-*li*-ess-ta.（使役）
　　母親-NOM　子供-ACC　歩く-CAUS-PAST-DEC　‘母親が子供を歩かせた。’

(38) a. *ai-ka　emeni-eykey　kel-*li*-ess-ta.（*受身）
　　子供-NOM　母親-DAT　歩く-PASS-PAST-DEC
　b. *ai-ka　cal　an　kel-*li*-n-ta.（*可能）
　　子供-NOM　よく　Neg.　歩く-POTEN-PRES-DEC
　c. *ai-ka　cecello　kel-*li*-n-ta.（*自発）
　　子供-NOM　おのずと　歩く-SPON-PRES-DEC

この動詞は使役構文のみ成立し，受身・自発・可能は成立しない。[30]

3.2.4 自動詞A2：*tallita* タイプ

(39) a. *tallita*‘走る’ → **talli-i-ta*
　b. *ttwyta*‘跳ぶ’ → **ttwy-i-ta*
　c. *kata*‘行く’ → **ka-i-ta*
　d. *ota*‘来る’ → **o-i-ta*

自動詞A2タイプは，使役も含め，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の派生形はすべて成立しない。

---

(29) 日本語の「この水は飲める」タイプの可能文も，「この水は，（私には）飲める」から「この水は，（誰にでも）飲める」を経て「この水は飲める（＝おいしい）」という潜在的属性文が得られたと考えられる（cf. Kageyama 2006）。一方，受身の中にも属性解釈を受けるものがある。益岡（1987：190）は「この論文は，チョムスキーに数回引用された」のような文を「属性叙述受動文」と名づけている（高見 1991の「特徴づけ」も参照）。これに対して「*この小説は，チョムスキーに数回読まれた」のような文は許容されないとされる。この点を，韓国語側からみると大変興味深い事実が見つかる。この二つの文を韓国語に訳した場合，前者は日本語と同様に属性解釈を受けるが，ただし接辞 *-i/-hi/-li/-ki* ではなく，助動詞 *-cita*（漢語動詞の場合は *-toyta*）が対応する（詳細は4.3節参照）。しかし後者の文は *-cita* と接辞 *-i/-hi/-li/-ki* が両方とも可能ではあるが，日本語と同様に属性解釈ができず，したがって不適格となる。権（1993）によれば，*-cita* の受身形式は歴史的に後から発達したものである。この点を考慮すれば，属性解釈を受けて成立することになる受身文は，韓国語の場合歴史的に後で現れたことになる。

(30) この動詞に助動詞 *-cita* を用いると，受身は不可能であるが，現在時制の一人称を中心に自発や可能は許容される。*-cita* に関しては Lee（1993），鄭（1999），円山（2006）などを参照。

3.2.5 自動詞B1：*maluta* の場合

(40) a. ipwul-i mal-(l)ass-ta.（自動詞）
布団-NOM 乾く-PAST-DEC ‘布団が乾いた。’

b. emeni-ka ipwul-ul mal-*li*-ess-ta.（使役他動詞）
母親-NOM 布団-ACC 乾く-CAUS-PAST-DEC
‘母親が布団を干した／乾かした。’

(41) a. ipwul-i emeni-?ey uyhay/*eykey mal-*li*-ess-ta.（?*受身2）
布団-NOM 母親-by/DAT 乾く-PASS-PAST-DEC
‘布団が母｛?によって／*に｝干された／乾かされた。’

b. nwukwunka-ey uyhay ipwul-i cal
誰か-by 布団-NOM よく
mal-*li*-e-iss-ess-ta.（受身2／結果受身2）
乾く-PASS-RESULT-PAST-DEC
‘誰かによって布団がよく乾かされていた。’

c. ipwul-i cal mal-*li*-e-iss-ne.（自発／結果受身2）
布団-NOM よく 乾く-SPON/PASS-RESULT-MOD
‘（なぜか）布団がよく乾いているよ。’
‘（誰かが干した結果）布団がよく乾かされているよ。’

d. hayspyeth-ey ipwul-i cal mal-*li*-e-iss-ess-ta.（自動詞？，受身？）
日光-LOC 布団-NOM よく 乾く-INTR/PASS-RESULT-DEC
‘日光で布団がよく乾いていた。’
‘日光に（当たって）布団がよく乾かされていた。’

(42) a. (na-hanthey-nun) ipwul-i comchelem cal an
(私-DAT-TOP) 布団-NOM なかなか よく Neg.
mal-*li*-n-ta.[31]
乾く-POTEN-PRES-DEC
‘（私には（いくらやってみても））布団がなかなか乾かない（乾かすことができない）んだ。’（可能：一人称）

b. ipwul-i cecello mal-*li*-e-iss-ess-ta.（自発）
布団-NOM おのずと 乾く-SPON-RESULT-PAST-DEC
‘（家に帰ってみるとなぜか濡れていた）布団が勝手に乾いていたんだ。’

(31) *Ceon-uloto chwungpwunhi cal mal-li-ne-yo.*（低温でも十分よく乾きます（乾かすことができます）ね。）のように否定でなくても可能の意味が出る。

c．#i　ipwul-un　mal-*li*-n-ta.（*自動詞：潜在的属性）
この　布団-TOP　乾く-POTEN-PRES-DEC　（不特定多数の自発･可能）
意図：‘この布団は乾くものだ。’
‘この布団は（日光に干してさえおけばいいので，誰にでも）乾く（乾かすことができる）。

Maluta‘乾く’は使役他動詞をもっていること以外は，他動詞Bの*yelta*‘開ける’とほぼパラダイムが一致する。すなわち受身においては，不特定の動作主をもつ受身2と，不特定の動作主を含意する結果受身2が成立する。また（41d）のように，自動詞か受身かが判断できず，「日光」が当該事象を成立させる単なる原因に過ぎないのか，動作主的な存在なのかが不明確である。自発・可能も，一人称はもちろん，（42c）のように一人称から開放された不特定多数の自発・可能が成立する。しかし，潜在的属性を表す自動詞は不自然である。この点だけは異なる。この違いは，布団の乾きは日光に全的に依存しているため，対象物に対する属性解釈を妨げているからであろう。この動詞において最も注目すべきは，状態変化自動詞を基盤にしたヴォイス現象が見られたことである（次の自動詞B2も同様。詳細は鄭 1999，2001，2004，2006を参照）。

3．2．6 自動詞B2：*colta*，*kayta* の場合

(43) a．ai-ka　col-ko iss-ta.（自動詞）
子供-NOM　居眠りする-PROG-DEC　‘子供が居眠りしている。’
b．*emeni-ka　ai-lul　col-*li*-ess-ta.（*使役）
母親-NOM　子供-ACC　居眠りする-CAUS-PAST-DEC
直訳：‘母親が子供を居眠りさせた。’

(44) a．col-*li*-n-ta.（自発：一人称）
居眠りする-SPON-PRES-DEC　‘眠たい’
b．*ce　haksayng-i　col-*li*-n-ta.（*自発：特定の個人）
あの　学生-NOM　居眠りする-SPON-PRES-DEC
直訳：‘あの学生が眠たい’
c．sikhwu-ey-nun　nwukwuna　ta　col-*li*-n-ta.（自発：不特定多数）
食後-LOC-TOP　誰でも　みんな　居眠りする-SPON-PRES-DEC
‘食後には，誰でもみんな眠たくなる（ものだ）。’

(45) a．hanul-i　malkkey　kay-ss-ta.（自動詞）
空-NOM　きれいに　晴れる-PAST-DEC　‘空がきれいに晴れた。’

b．*hanul-ul　malkkey　kay-*i*-ess-ta.（*使役）
　空-ACC　きれいに　晴れる-CAUS-DEC

(46) (wuenilinci)　hanul-i　kwulum hancem epsi malkkey
（なぜか）　空-NOM　雲一つなくきれいに
kay-*i*-e-iss-ess-ta.（自発）
晴れる-SPON-RESULT-PAST-DEC
‘（空を見上げたら，なぜか）空が雲一つなくきれいに晴れ上がっていた。’

自動詞B1と異なって，自動詞B2の動詞には対応する使役は存在しない。にもかかわらず，自動詞B1と同じように状態変化自動詞を基盤にしたヴォイス現象が見られる（cf. 李 1970，李・任 1983，宋 1995）。(44a) の一人称の自発と，(46) のように，事態の終点からみてその起源が不明確なものとして認識された，自然変化事象の自発が成立する（(42b) も同様）。しかし，受身は成立しない。また (44b) のように特定の個人（三人称）には制約があるが，(44c) のように不特定多数の自発は許容される。自発・可能において特定の個人に対する制約は，視覚・聴覚動詞にも同様に見られる（(70-72) 参照）。

3.2.7 まとめ

以上の考察に基づくと，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* が関与する構文の範囲は多様で広範囲に渡っていることがわかる。まず使役と五種類の受身がある。次に，一人称の自発と可能，一人称から開放された，不特定多数の自発と可能，それから潜在的属性を表す自動詞もある。上の観察に基づいてこれらを最も安定的・生産的に成立する順（サイズの大きさ順）に並べると，一人称の自発・可能＞不特定多数の自発・可能＞属性の自動詞・可能の順であること，そして特定の個人（三人称）は普通許容されないことがわかった。なお，特定の個人への制約は受身2でも同様に働いている。したがって，もしこれを一人称から不特定多数・不特定の個人への展開としてみることができれば，受身2は不特定多数の自発・可能とは異なる方向の，一人称自発・可能から受身2への展開としてみることができよう（図3および4.3節参照）。

ここで，まず他動詞ベースの使役と五種類の受身を，2節と同様に行為の起点と終点，遂行の三局面をもった事態構造の観点からまとめると，表10のようになる。ただし，括弧付きの付加詞名詞句は，現実には存在するが言語化されない不特定の動作主を表す。また括弧付きの与格名詞句は，結果状態に焦点が当たっているために，行為遂行のときの動作主性が背景化され見えなくなっているものを表す。

構文	行為の起点 始発動作主	行為の終点 着点・被動者	行為の遂行 動詞語根の動作主
使役	主格名詞句	与格・対格名詞句	与格名詞句
受身1	与格名詞句	主格＝対格名詞句	与格名詞句
二重主格受身	与格名詞句	第一主格＝第二主格	与格名詞句
結果受身1（33c）	（付加詞名詞句）	与格名詞句・主格名詞句	（与格名詞句）
結果受身2（35c）	（付加詞名詞句）	主格名詞句	（付加詞名詞句）
受身2	付加詞名詞句	主格名詞句	付加詞名詞句

表10　他動詞ベースの使役と五種類の受身

表10をみると，始発動作主・被動者・動詞語根動作主のコード化において，受身1と受身2は明らかに異なっている。また二重主格受身は受身1に近く，結果受身2は受身2に近い。そして結果受身1を除けば，四種類の受身構文はすべて，始発動作主＝動詞語根動作主の関係である。一方結果受身1は，始発動作主（第一動作主）と動詞語根の動作主（第二動作主）が分かれている。さらに動詞語根の動作主をみると，結果受身1は，受身1と二重主格受身と同様に使役構文を基盤にしていることがわかる。

次に，自動詞B1を基準にして自動詞ベースの使役と受身，自発・可能をまとめると表11となる。使役他動詞を除けば，他の全てで動詞語根の主体（無生物主語）＝被動者の関係があり，それが主格名詞句でコード化されている。そして，始発動作主の存在は自動詞をベースにして，接辞 *-i*/*-hi*/*-li*/*-ki* が付加された段階で始めて導入されたものであることがわかる。

すなわち，可能では経験者として理解される一人称の与格主語が導入され，受身2では不特定の動作主が付加詞名詞句にコード化される。これをみると，それぞれ言語的コード化は異なるにせよ，この接辞の付加によって現れるすべての構文は事態構造が一致することがわかる。[32]

(32) 李・任（1983）は，「自動詞の被動」と名づけながらも，対応する能動文は使役他動詞文であると提案したことがある（宋 1995も参照）。しかし本稿の分析によれば，自動詞ベースの自発・可能・受身は使役他動詞とともに，接辞 *-i*/*-hi*/*-li*/*-ki* の派生構文であるため，事態構造が一致しているということに他ならない。仮に李・任（1983）の提案が正しいとすれば，彼らも認めているように，自動詞B2タイプのふるまいに関しては，説明できなくなる。

構文	行為の起点 始発動作主	行為の終点 被動者	事態の遂行 動詞語根の主体
使役他動詞	主格名詞句	対格名詞句	対格名詞句
受身２（41b）	付加詞名詞句	主格名詞句	主格名詞句
結果受身２（41c）	（付加詞名詞句）	主格名詞句	主格名詞句
可能（42a）	（一人称与格主語）	主格名詞句	主格名詞句
自発（42b）		主格名詞句	主格名詞句

表11　自動詞ベースの使役と受身・自発・可能（自動詞Ｂ１の場合）

以上のように，「行為の発達」の観点から事態構造と言語的コード化の関係を分析してみると，自動詞Ｂ１がなぜ他動詞Ｂと大変類似したふるまいを見せるかが理解される。それは接辞 *-i/-hi/-li/-ki* が，行為の起点の始発動作主（または自分以外の他の要因）は何か，終点の被動者は何か，行為遂行の動作主（または事態遂行の主体）は何か，という三つの行為の局面において，それぞれの事態参加者のあり方を問題にする形式だからである。言い換えれば，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* が関与するすべての構文は，同一の事態構造を基盤にしているが，事態参加者の言語的コード化は異なる，それぞれの派生構文であると結論される。

以上を２節の考察も反映して，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の関連構文の範囲とそのネットワークを図式的に示すと，図３のようである。括弧の中は動作主の情報である。

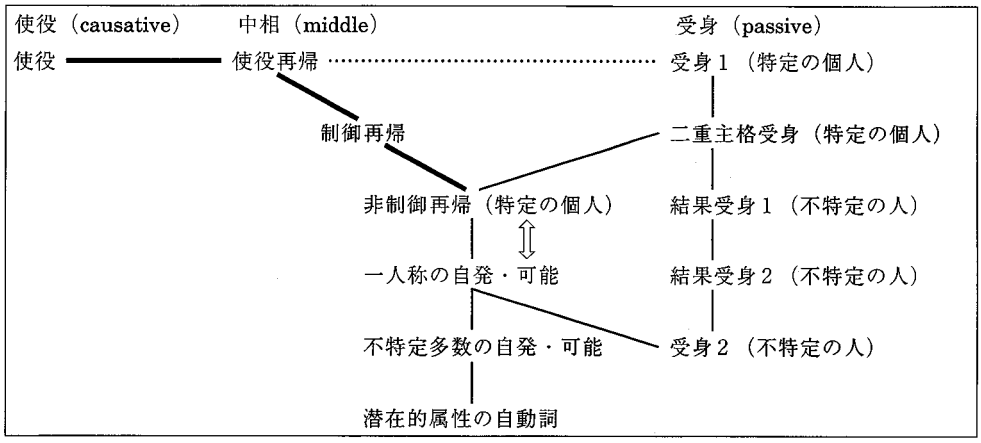

図３　接辞*-i/-hi/-li/-ki* の関連構文の範囲とネットワーク

２節でのべたように，受身１は使役や使役再帰と構文を共有している。しかしながら行

為の起点・終点・遂行の三つの局面における事態参加者のコード化においては，使役・使役再帰・制御再帰・非制御再帰の連続線（太い線で示した）から離れており，直接的には繋がらない。一方，非制御再帰までくると，使役や使役再帰では対格名詞句にコード化されていた移動物が主格をとり，二重主格構文が現れることになる。したがって，使役再帰から始まった再帰構文の連鎖は，その終りにおいてはむしろ二重主格受身や一人称の自発・可能などと繋がるようになるのである。

さて，ここで問題は事態参加者のコード化を基準に得られたこのようなネットワークを，Haspelmath（1990）が示した図1のように，使役から使役再帰（・制御再帰）を経て非制御再帰への発達，あるいはもっと進んで非制御再帰から自発・可能へ，さらには二重主格受身と受身1と受身2へのように，一方向的な発達を成し遂げたものとして見なすことができるかどうかである。その答えはノーである。まず第一に，このネットワークには生産性の観点が反映されていない。第二に，動詞派生の方向性も反映されていないからである。派生の方向については4節で詳細に取り上げるが，とりあえず非制御再帰を成立させる動詞は大部分対応する使役をもたない動詞なので，それを使役から発達したものと見なすには無理がある。

では，このネットワークに生産性の観点を反映すればどうなるのだろうか。まず，使役再帰と制御再帰の生産性は，精々2節で取り上げたごく一部の動詞に（語彙的に）限定された，非常に小さいサイズのカテゴリーであることを指摘しなければならない。これに対して，非制御再帰はそれより遥かにサイズが大きい（4節も参照）。つまり生産性の面からみると，再帰構文の中心にあるのはむしろ非制御再帰であることになる。もう一つ重要な点は，使役を除けば，このネットワークの中で最もサイズが大きいのは，一人称の自発・可能である。自動化を許す動詞はほとんど一人称の自発・可能は成立させるといっていいほど生産的である。こうみてくると，自動化においては，非制御再帰と一人称の自発・可能の対立が輪郭を現してくることに気付くであろう。

それは，3.1節でのべたように，両者の間には意味的・統語的な接近（共通点）がある一方で，完全な相互分布とまではいかないにしても，見逃せない重要な分布上の対立が見られるからである（表8参照）。すなわち，自発・可能は現在時制をとる一人称（与格主語）を基盤にして，一方では不特定多数を経て潜在的属性の自動詞へと繋がり，他方では不特定の個人の受身2への連続性を見せるのに対して，非制御再帰は主として過去時制をとり，特定の個人（一人称を越えて三人称を含む）が始発動作主＝動詞語根動作主（主格主語）であるからである。このことから，非制御再帰を基盤にして二重主格受身・受身1への連続性を想定することはそれほど不自然ではない。この点について詳細な検討は，4.3節と4.4節を見られたい。

最後に，自動詞B1と自動詞B2から明らかになったのは，自発・可能・受身は必ずしも統語的自動化を要求しない，という注目すべき発見である。これは次のような一般化として提示できよう。

(47)　自発・可能・受身は，統語的自動化を経ずに存在できる。

3.3 接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能と派生構造

本節では，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能の観点からこれらの関連構文全体を捉えなおしてみよう。

さっそく次のような言語的コード化原則を提案し，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能を捉えてみる。

(48) 接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の言語的コード化原則

(i) 行為または影響を受ける被動者は，文法的項として必ずコード化する。

(ii) 行為の起源（始発動作主）または原因（被動者に直接作用し当該の事態を達成させる人間以外の他の要因。併せて「起源」とする）は，外的要因（external cause）として必ず導入する。[33]

(iii) ただし起源は，認知的に明示的な場合にのみ文法的項としてコード化する。

すなわちこの接辞は，被動者を表現の中心におき（すなわち，行為の終点に立って）行為の起源を述べる形式あり，そのため外的要因も必ず導入される。したがって最小限の表現になった場合は，たとえ被動者のみ言語化されたとしても，意味的には外的要因を含意しなければならない。[34] また本稿では「おのずと」「勝手に」「なぜか」のような副詞句も，自分でない他の不明確な要因の言語的コード化と見なし，外的要因の一種とした（3.1節参照）。

これに基づくと，それぞれの構文は次のように対応する。ただし一人称の自発・可能の場合は，行為の終点においてその起源が問題にされたときには，一人称はすでに経験者となっ

(33) 本稿に近い考え方で使役と受身の関連を統一的に説明しようとした論考として，Kim (1982) と金 (1983) がある。彼は使役だけでなく，受身についても CAUSE という抽象的な概念を設けて説明を試みた。

(34) この点については言語間の相違も視野に入れる必要がある。鄭 (2006：73-95) では動格言語の分裂自動詞の現象と韓国語と日本語の自動詞のふるまいを考察し，Perlmutter (1978) の非対格仮説に反する言語と反しない言語の二つのタイプがあることを突き止めた。また両者の相違については「解釈パラメータ」(conceptual parameter) を提案して説明している。本稿の観点からそれを再解釈すれば，行為の終点に立って行為の起源をのべる韓国語・中央ポモ語タイプの言語と，行為の起点（または遂行）に立って行為の起源をのべる日本語・ラコタ語タイプの言語があり，前者は非対格仮説に反する言語である，となる。Shibatani (2006：228) では，動格言語の分裂自動詞の現象を行為の起源の観点から見直し，意志的文と自発文の対立として定義している。

ているので，事態の達成には自分でない他の要因の関与が必要とされる。

(49) 起源の認知的明示性と構文の対応

(ｉ) 起源が認知的に明示的である ⇒ 使役他動詞・使役・受身１・二重主格受身

(ii) 起源が認知的に非明示的である ⇒ 自発・可能・結果受身１，２・受身２

ここで外的要因のスケールを図４のように設けると，[35] (49) は次のように提示できる。

図４のスケールには，認知的明示性以外にも，外的要因に関しては人間と人間以外の要素が区別されているので，実際は四通りの要素が絡んでいる。「不特定の人」は非明示的であるが，自発と受身の連続性を考慮に入れて，右側に示した。自発・可能と，その反対側にある受身２・結果受身は，起源が非明示的である点では一致し，起源（外的要因）が人間であるか人間以外の要素であるかでは対立し，区別される。

外的要因のスケール

原因					始発動作主
...不明確な要因＞	（個体性の低い）明示的な要因＞	自然力＞	不特定の人＞	特定の個人	
非明示的 ←———	———	———	———	———→	明示的
自発 ←———	———	———→		受身２	受身１／使役
可能				結果受身	二重主格受身

図４　起源の認知的明示性と構文の対応

では，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* は実際どのようにそれぞれの派生構文を作り上げるだろうか。(48) に基づき，図５のような派生構造を仮定する。[36] 正確には，図５の派生構造に基づいて，上記の (49) の構文が派生される，という提案である。図５において接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能は，まず被動者を表現の中心におき，それから外的要因を導入するものとして捉えられる。そしてそれぞれの派生構文は，図４の外的要因の諸相に応じて自動構文から使役構文まで対応できる。具体的には，外的要因が認知的に非明示的な場合は，自発・可能・結果受身・受身２などの自動構文が成立し，明示的な場合は使役他動詞・使役が成立する。もっと一般的な言い方をすれば，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* は行為の終点に立って行為の起源をのべ，ま

(35) このスケールは鄭 (2004：333) の提案をもとに作成されたものである。

(36) この派生構造は，70年代に大きな議論を巻き起こした uniform theory（日本語の直接受身と間接受身を統一的に説明するために提案された仮説）を思い起こせるかもしれないが，まったく異なるものである。まずこれは統語上の派生ではない。次に，使役も派生できる構造である。強いていえば，使役構造に似ているが，実際は自動化もここから派生されるので，使役構文そのものでもない。韓国語側の議論としては，使役と受身を同一基底から導き出そうとした Lee (1974) および，梁 (1979) の議論とも比較されたい。

た行為の起点に立っても自分が行為の終点であることをのべる形式なので，いわばヤヌスの顔（Janus-faced）のように，二つの顔をもっている。すなわち，派生の結果，統語的に反対方向に属する構文が同時に得られる。これを，便宜上「ヤヌスシステム」（Janus system）と呼んでおく。

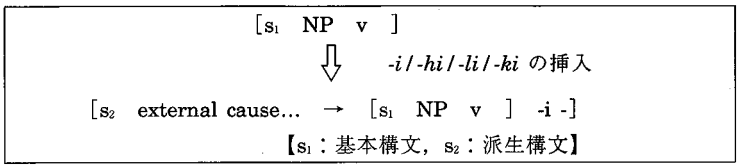

図5　接辞*-i/-hi/-li/-ki* の派生構造：ヤヌスシステム

ところが，この派生構造においても受身1と二重主格受身の成立は説明できないことがわかる。なぜならば，外的要因が認知的に最も明示的な「特定の個人」の場合は，使役構文を派生してしまうからである。では，この二構文はどのように成立するのだろうか。それを知るためには，この接辞が関与する動詞の意味的側面をまず考察する必要がある。

4．派生の方向とヴォイス・カテゴリーの連続性

本節では，派生の方向と動詞意味の間に有意義な相関が見られるかどうかを考察し，それをもとに派生の方向からみたヴォイス・カテゴリーの連続性を提示する。そこで，対応する使役形をもたない他動詞Bタイプのふるまいに注目すれば，非制御再帰と二重主格受身，受身1の連続性が捉えられ，後者の二構文の成立が説明できることを，以下でのべる。

4．1　派生の方向からみた動詞の意味クラス

派生の方向と動詞の意味の間には緊密な相関があるだろう。このような想定の下で，とりあえず当該の動詞が派生に関与する場合，（ｉ）動作動詞か非動作動詞か，（ii）接辞 *-i/-hi/-li/-ki* を付加したときに対応する使役があるかないか，を基準に，(32) の動詞分類を若干変更して (50) のように分類する。以下では，この順番に見ていき，派生の方向と動詞の意味との間に，どのような有意義な相関が見られるかを考察する。

(50) 動詞分類（2）

a．派生に関与する動詞

（ｉ）動作動詞（active verbs）── 使役がある：他動詞A，自動詞A
　　└ 使役がない：他動詞B

（ii）非動作動詞（inactive verbs）── 使役がある：自動詞 B 1，形容詞
　　└ 使役がない：自動詞 B 2

b．派生に関与しない動詞：漢語動詞，その他の他動詞，自動詞など

4．1．1 派生に関与する動作動詞

他動詞 A タイプ：対応する使役がある

（51）pota‘見る’，tutta‘聴く’，ilkta‘読む’，ipta‘着る’，sinta‘履く’，ssuta‘かぶる’，tulta‘（自分の）手に持つ’，capta‘掴む’，anta‘抱く’，epta‘負んぶする’，mekta‘食べる’，mwulta‘噛む’，‘咥える’，kkita‘（自分の指に）はめる’，ssipta‘（ガムを）噛む’，kkakkta‘散髪する’，ssista‘（自分の体を）洗う’，kamta‘（自分の髪の毛を）洗う’，pesta‘脱ぐ’，mathta‘預かる’，kwulmta‘食事を抜く’

他動詞 A タイプは，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* による使役化はすべて可能である。一方，自動化に関しては次のような制約がある。（i）ごく一部であるが，自動化への派生形がないものがある。たとえば，*mathta*‘預かる’，*kwulmta*‘食事を抜く’。（ii）（i）の動詞を除けば，一人称の自発・可能への派生はほとんどすべて可能である。しかし，（iii）受身2への派生は不自然である。（iv）ごく一部使役再帰や制御再帰が可能な動詞がある。たとえば，*anta*‘抱く’，*epta*‘負んぶする’。また，（v）一部は二重主格受身・受身1も作れる。たとえば，*mwulta*‘噛む’，‘咥える’，*capta*‘掴む’など。たとえば，*mwulta*は（33）（34）のような分布を示す。

では，他動詞 A タイプの動詞には意味的にどのような共通点があるのだろうか。視覚・聴覚動詞，着脱動詞，身体手入れ動詞（body-care verbs），消化動詞（ingestive verbs）などを見ると，かつて朴（1978）が注目した再帰動詞のカテゴリーがその中心にあることは明らかである。それに *epta*‘負んぶする’，*mathta*‘預かる’など，その行為によって移動物が自分の領域内に納まるような動詞まで射程に入れると，むしろ鄭（1999）が提案した「自分の領域内に行為が納まる」動詞のほうがより適格な捉え方であるように思われる（鄭 2006：147-149参照）。それに，この捉え方は Haiman（1983）の「求心動詞」（Introverted verbs）とも類概念なので，都合がよい。[37] ただし他言語の状況からみると，この意味カテゴリーは中相範疇に属するものである（Kemmer 1993, Shibatani 2006）。

他動詞 B タイプ：対応する使役がない

(52) yelta‘開ける’, chata‘蹴る’, palpta‘踏む’, cepta‘畳む’, kkekta‘折る’, kelta‘掛ける’, cciluta‘刺す’, caluta‘切る’, maytalta‘ぶら下げる’, ccicta‘破る’, kkunhta‘切る’, makta‘詰める’, pakta‘釘を刺す’, ccikta‘印を押す’,‘撮る’, kkalta‘敷く’, takkta‘拭く’,‘磨く’, tepta‘被せる’, nakkta‘釣る’, nohta‘置く’, phalta‘売る’, ppaysta‘奪う’

他動詞 B タイプは，対応する使役はないが，自動化はすべて可能である。その中で，（i）最も安定的・生産的に作れるのは，一人称の自発・可能である。（ii）受身2が可能な動詞もある。たとえば，*yelta*‘開ける’。（iii）一部の動詞を除けば（たとえば，*phalta*‘売る’），結果受身も比較的に作りやすい。一方，（iv）非制御再帰を作れるものもかなりある。たとえば，*kelta*‘掛ける’，*cciluta*‘刺す’など。（v）制御再帰を作れるものもなくはない。たとえば，*maytalta*‘ぶら下げる’。（iv）二重主格受身・受身1が可能なものも見られる。たとえば，*chata*‘蹴る’，*palpta*‘踏む’。たとえば，*yelta*‘開ける’は（35）（36）のような分布を見せる。

では，他動詞 B タイプの意味的共通点は何だろうか。他動詞 A タイプと比べてみると，行為が外に向かって働く動詞，すなわち「自分の領域外に行為が及ぶ」動詞であることは一目瞭然である（鄭 1999）。Haiman（1983）の「遠心動詞」（Extroverted verbs）に相当するものとして特徴付けることができよう。すると，韓国語では「求心動詞」と「遠心動詞」の意味対立が，対応する使役があるか（他動詞 A タイプ），ないか（他動詞 B タイプ），という形で反映されているといえる（表12参照）。

自動詞 A タイプ：対応する使役がある

(53) nolta‘遊ぶ’, ketta‘歩く’, wulta‘泣く’, wusta‘笑う’, cata‘寝る’, nalta‘（鳥が）飛ぶ’

自動詞 A タイプは，（37）（38）で考察したように，　使役化はできるが，自動化はで

(37) Haiman（1983）は，*shave*，*wash* のような動詞を「求心動詞」，*kick*，*hit* のような動詞は「遠心動詞」と呼んでいる。両者の興味深い対立は中相範疇に見られ，前者は *He saved.* のように，ゼロ（または短縮形式）の再帰代名詞が現れるが，後者は *He kicked himself.* のように完全形式が現れる。Haiman によれば，このようなふるまいは，「求心動詞」は普通自分の身の上に行われる行為なので，行為の対象が予想されやすいからであり，「遠心動詞」は常に他に向かって行為が行われるので，それが予想されにくいからである。

きない。ただし *nalta*‘(鳥が) 飛ぶ’は完全に不可能とまではいえないが，普通は不自然である。したがって，これらの動詞は接辞 *-i/-hi/-li/-ki* による可能・自発・受身はすべて表現できない。

4.1.2 派生に関与する非動作動詞

自動詞 B1タイプ：対応する使役他動詞がある

(54) chata‘満ちる’，kkayta‘起きる’，nalta‘埃が飛ぶ’，elta‘凍る’，nokta‘溶ける’，maluta‘乾く’，ssekta‘腐る’，sakta‘朽ちる’，‘キムチが醗酵して味が付く’，kkulhta‘沸く’，cwukta‘死ぬ’，macta‘当たる’，sokta‘騙される’

自動詞 B1タイプは，すべて対応する使役他動詞をもっている。一方自動化においては，(i) 一部の動詞を除けば (たとえば，*cwukta*‘死ぬ’)，一人称の自発・可能を中心に許され，自然力まで可能である。たとえば，*kkayta*‘起きる’，*nalta*‘(紙飛行機が) 飛ぶ’。(ii) 結果受身も作れる。たとえば，*maluta*‘乾く’。(iii) 受身1も非常に限られた状況ではあるが，許される場合がある。たとえば，*sokta*‘騙される’(鄭 2004：332-333参照)。例は (40-42) を参照されたい。

形容詞：対応する使役他動詞がある

(55) nopta‘高い’，nacta‘低い’，nelpta‘広い’，copta‘狭い’，palkta‘明るい’，pwulkta‘赤い’

これらの形容詞は，使役化はできるが，自動化はできない (Lee 1976参照)。

自動詞 B2タイプ：対応する使役がない

(56) kayta‘晴れる’，kolmta‘膿む’，colta‘居眠りする’，yelta‘実が実る’，tong-i thuta‘夜が明ける’，kamki (-ka) tulta‘風邪を引く’，sin-i tulta‘神がのりうつる’

自動詞 B2タイプには，対応する使役は存在しないが，一人称を中心とした自発・可能

と自然現象の自発は可能である。例は（43-46）。

4.1.3 派生に関与しない動詞

どちらにも派生しない動詞のリストをここにあげておく。[38]

（57）*-hata* 動詞および漢語動詞すべて

hata‘する’，malhata‘話す’，ilhata‘働く’，salanghata‘愛する’，conkyenghata‘尊敬する’，kongpwuhata‘勉強する’，wuntonghata‘運動する’，kipwuhata‘寄付する’，napphwumhata‘納品する’，hennaphata‘献上する’，pannaphata‘返納する’など

（58）その他：自動詞と他動詞など[39]

kata‘行く’，ota‘来る’，mannata‘会う’，talmta‘似る’，issta‘ある’，‘いる’，kacita‘持つ’，mancita‘触る’，masita‘飲む’，cwyta‘握る’nukkita‘感じる’，tencita‘投げる’，kkayta‘割る’，pwuswuta‘壊す’，mwunettulita‘倒す’，ttaylita‘殴る’，cwuta‘やる’，sata‘買う’，kaluchita‘教える’，paywuta‘教わる’，‘学ぶ’，ponayta‘送る’など

4.1.4 まとめ

以上，派生の方向と動詞の意味の間に有意義な相関が見られるかどうかを考察した。まず，他動詞Aタイプと他動詞Bタイプには，自分の領域内に行為が納まるか，自分の領域外に行為が及ぶか，という行為の展開において意味的相違が見られた。このような意味的相違と対応する使役の有無には相関関係があると考えられる。表12を見られたい。

次に，他動詞Aタイプと自動詞Aタイプ，とりわけ他動詞Aタイプの非使役（基本形）と使役（派生形）の対立には，行為の展開と終結の二点において意味対立が見られる。（派生形はアポストロフィで表示した。）行為の展開においては，自分の領域内に行為が納まるか，それとも他者の領域に行為が及ぶか，という点において最大の意味対立がある。一方，行為の終結においては，行為の結果が自分の領域内に残存するか，他者の領域に残存するか，という点において最大の意味対立がある。（この場合，使役構文には被使役者が所有格で標示される，所有格構文も対応できる（(15) 参照）。被使役者標示に見られ

(38) 受身をもたない動詞だけに限ったリストは，任（1998：310-311）を参照されたい。それぞれの動詞に対して音韻論的，意味論的，統語論的，歴史的変化などによる要因があげられている。

(39) この中にも方言によっては，一人称の自発・可能表現を中心に許される動詞があるように思われる。筆者が直接聞いた表現（慶尚南道方言）では，次のようなものがあった。*Kil-eyse chinkwu-lul mannay-i-se nuc-ess-e.*（道端で（偶然）友達に出会えて，それで遅かったの。）

る所有格構文と与格構文の関係について詳細は，鄭 2006を参照。）なお，この二点においては「やりもらい動詞」の意味対立とも類似していることがわかる。

真ん中の「他物に行為が及ぶ」が表す遠心動詞の領域には，主として他動詞Bタイプと自動詞B1タイプの使役（自B1'）が集まってくる。ここで注目されたいのは，他動詞Bのふるまいである。すなわち，*chata*‘蹴る’には対応する使役はない。しかしながら表12のように，使役動詞（他A'）の意味領域である「他者の領域」，すなわち「他者の身体部分を蹴る」という意味を表すことができる。他動詞Bタイプのこのようなふるまいは，対応する使役をもたない動詞が，使役構文に依拠する受身1を作ることに対する，問題解決の鍵を提供するものと思われるので，4.4節で改めて考察する。

自分の領域内に行為が納まる	自分の領域外に行為が及ぶ	
	他物	他者の領域
非使役動詞（基本形） 他A，自A introverted verbs *patta*（もらう）動詞 行為の結果が自分の領域内に残存する	非使役動詞／使役動詞 他B／自B1' extroverted verbs	使役動詞（派生形） 他A'，自A' *cwuta*（やる）動詞 行為の結果が他者の領域に残存する
自分の身体（部分）を洗う *ssista* 自分の服を脱ぐ *pesta*	ジャガイモを洗う *ssista* ジャガイモの皮を剥く *pes-ki-ta* 石を蹴る *chata*（他B） 洗濯物を干す，乾かす *mal-li-ta*（自B1'）	他者の身体（部分）を洗う *ssis-ki-ta* 他者の服を脱がす *pes-ki-ta* 他者の身体部分を蹴る *chata*

表12

4.2 派生の方向からみたヴォイス・カテゴリーの連続性

前節の考察に基づき，派生の方向からみたヴォイス・カテゴリーの連続性を示すと，図6のようになる。派生の方向が比較的安定的・生産的と認められたものは太い線で示した。他動詞基本形は，自動化において派生の方向が二つに分かれている。一人称の自発・可能と非制御再帰である。非制御再帰への派生は主として他動詞Bタイプに限られる。そのため，一人称の自発・可能よりはサイズが小さい。しかしながら，その左側には制御再帰があり，右側には二重主格受身・受身1への連続性が示されているように（図3も参照），受身1の成立においては重要な位置を占めている。この連続性については4.4節でのべる。

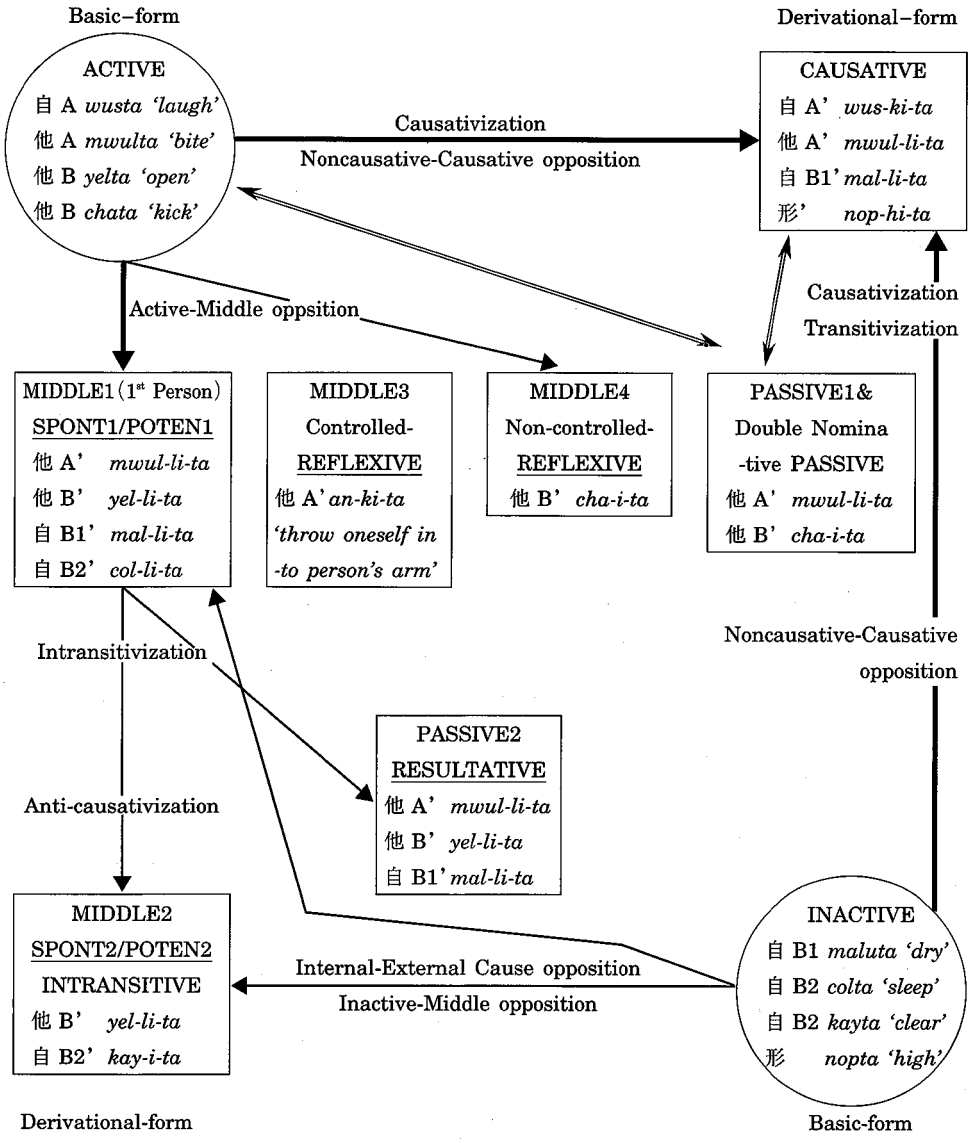

図6　派生の方向からみたヴォイス・カテゴリーの連続性

自動化において，より安定的・生産的に成立するヴォイスの高い順は，(59) である。(59) の（i）と（ii）の状況が全体的に把握できる例は，3.2節を参照されたい。また（i）の連続性については，3.2.2節と3.2.7節を見られたい。なお一人称の自発・可能が（i）と（ii）のように二方向性をもちうることについては，3.1節と3.2節の議論を参照されたい。

(59) より安定的・生産的に成立するヴォイス：高＞低の順

(ｉ) 一人称の自発・可能 ＞ 不特定多数の自発・可能 ＞ 潜在的属性の自動詞

(ii) 一人称の自発・可能 ＞ 結果受身 ＞ 受身2

4.3 一人称自発・可能から受身2への連続性：成立条件と制約

ここでは (59) の (ii) の連続性について少し詳細に考える。結論を先にいうと，この連続性は（行為の起源である）動作主の言語化制約によって現れたものであり，そこには認知的明示性が関与する。

すなわち，結果受身は行為終了後の結果状態を基盤にして，（すでに知られた動作主でなければ）そこから当該の事態を引き起こした動作主が推理される。これを「非直示型の認知的明示性」と呼ぶ。したがって，結果受身は一人称の自発・可能より限定されるであろうことは十分考えられる。またそのときの動作主は含意されるだけでよいので，受身2よりは制約が少ないであろうことも容易に想像できる。一方受身2は，構文上は結果受身と同様に無生物主語である。にもかかわらず，主として受身1と同様の条件，すなわち行為遂行時の状況に焦点を当て，そこから事態を引き起こした動作主を表現することが要求される。これを「直示型の認知的明示性」と呼ぶ。このため，受身2は普通は不自然である。((35b) では，不特定の動作主とともに副詞句 *kapcaki* ‘いきなり’ が用いられたことによって，自然さがアップし，適格な文となっていることに注目されたい。)

つまり，「直示型」における受身の動作主は，基本的には話者の直接経験（主に目撃）を基盤に表現される。したがって，認知的に明示的な動作主，すなわち「特定の個人」であるのが普通である（図4参照)。すると，この場合はむしろ能動文が選択され，受身2は普通成立困難である（例 (33) および下記の (61) 参照)。にもかかわらず，特定の個人を受身2の動作主として成立させる場合もある（下記の (65) 参照)。したがって，そこには何らかの動機付けが必要であるように思われる。それをここでは，結果受身と似たような状況，すなわち結果状態からみて行為の起源である動作主を推理する「非直示型の認知的明示性」が関与する，と考える。これに基づけば，もしある文において受身2が許容されれば，その状況は受身1の状況と異なり，「非直示型」であることが予測される。

さっそく次の対立から見てみよう。ここでは，行為遂行時に焦点を当てるために進行形を用いている。言い換えれば，話者がその場面を直接目撃している「直示型」の状況を設定している。この状況では受身1は適格に成立し，一つの事態に対する二つの異なる表現が自由に対応できる。一方，受身2は成立しない。すなわち，ここでは能動文しか選択できないのである（cf. Klaiman 1991：171-175, Yeon 1994：138-144, Shibatani 2006：252-253)。

(60) a. koyangi-ka cwuy-lul (cap-a) mek-ko iss-ta.（能動）
ネコ-NOM ネズミ-ACC（捕まえる） 食う-PROG-DEC
'ネコがネズミを（捕まえて）食っている。'

b. cwuy-ka koyangi-eykey (cap-a-) mek-*hi*-ko iss-ta.（受身１）
ネズミ-NOM ネコ-DAT（捕まえる） 食う-PASS-PROG-DEC
'ネズミがネコに（捕まえられて）食われている。'

(61) a. Chelswu-ka nay tosilak-ul mek-ko-iss-ta.（能動）
チョルス-NOM 私の弁当-ACC 食べる-PAST-PAST-DEC
'チョルスが私の弁当を食べている。'

b. *nay tosilak-i Chelswu-eykey/ey uyhay mek-*hi*-ko iss-ta.（*受身２）
私の弁当-NOM チョルス-DAT/by 食べる-PASS-PAST-DEC
'私の弁当がチョルスに／によって食べられている。'

ヴォイスの選択におけるこのような現象について，Shibatani(2006)は主題性の階層(Topicality Hierarchy）をより精緻化して，談話への関連性の階層を提案し説明している（cf. Klaiman（1991：169)。この階層によれば，無生物は談話への関連性が最も低い位置にあるとされる。したがって，たとえば，もし動作主が一人称であれば，無生物主語をとる受身文は普通成立しにくいとされる。

(62) Relevance Hierarchy（after Dixon 1994：85)

1st person pronouns	>	2nd person pronouns	>	Demonstratives 3rd person pronouns	>	Proper nouns	>	Common nouns Human animate inanimate

Shibatani（2006：255)

ところで，次の例を見られたい。(63）は，少なくとも（61）よりは遥かに容認度が上がっている。また（64）は不特定の動作主（ある一人の篤志家)，(65）は固有名詞を用いた特定の動作主（ピカソ）であるが，両者は完全に受身２を成立させている状況がある。

(63) a. nwukwunka-ka nay tosilak-ul ta mek-e-peli-ess-ta.（能動）
誰か-NOM 私の弁当-ACC 全部 食べる-すてる-PAST-DEC
'誰かが私の弁当を全部食べてしまった（何も残っていない)。'

b．?nwukwunka-eykey　nay tosilak-i　ta　mek-*hi*-e-peli-ess-ta.（受身２）
誰か-DAT　私の弁当-NOM　全部　食べる-PASS-すてる-PAST-DEC
‘誰かに私の弁当が全部食べられてしまった（何も残っていない）。’

(64) a．enu　han　tokcika-ka　i　kenmwul-ul　seywu-ess-ta.（能動）
ある　一人　篤志家-NOM　この　建物-ACC　建てる-PAST-DEC
‘ある一人の篤志家がこの建物を建てた。’

b．i　kenmwul-un　enu　han　tokcika-ey uyhay　seywu-e-*ci*-ess-ta.（受身２）
この　建物-TOP　ある　一人　篤志家-by　建てる-PASS-PAST-DEC
‘この建物はある一人の篤志家によって建てられた。’

(65) a．Phikhaso-ka　i　kulim-ul　kuli-e-ess-ta.（能動）
ピカソ-NOM　この　絵-ACC　描く-PAST-DEC
‘ピカソがこの絵を描いた。’

b．i　kulim-un　phikhaso-ey uyhay　kuli-e-*ci*-ess-ta.（受身２）
この　絵-TOP　ピカソ-by　描く-PASS-PAST-DEC
‘この絵はピカソによって描かれた。’

なぜこのような状況が現れうるだろうか。本稿では，次の二点が関与していると考える。第一点は，もし受身２が普通に成立するならば，その状況は受身１と異なり，結果受身と同様の状況である。すなわち，それは行為の終点にある結果状態から行為遂行時の動作主を想定することなので，そこには推論や知識が関与する。そして，その推論や知識が適切なものとして理解されれば，意味解釈においても不自然さはなくなり，動作主の言語化も制約されない。第二点は，この場合の推論や知識には認知的明示性が関与する。つまり，無生物主語をとる受身２の成立には，「非直示型の認知的明示性」が関与するということである。

この点を考慮した上で上記の文をみると，(63) の能動文は，私の弁当が空になっている結果状態から，誰かが食べたという行為遂行時の動作主を推論し，それを主語にコード化した文であることがわかる。この場合，話者はその事態を直接目撃しなくても，この推論は適切なものとされるために，その動作主（不特定の人）の主語へのコード化は制約を受けない。[(40)] このように結果状態から推論によって動作主を結びつけている「非直示型」の場合は，それに対応する受身文も容認度があがる（(61) と比較参照）。

他方の (64) (65) のような創造動詞は，意味的に行為の終点をもつ動詞である。この場

(40) 不特定の人を指す「誰か」には二通りの意味があることに注意されたい。一つは，直接目撃していても名前が知らないためにいう場合と，もう一つは推論によって導かれる場合である。前者は個体としての誰かであるが，後者はクラスの中の誰かなど，想定されるある（社会的）グループが背景にある。注41も参照。

合の能動文も，話者は，ピカソが「この絵」を描いているところやある篤志家が「この建物」を建てている過程を直接目撃しなくても，その動作主を主語にコード化することができる。ここでは，話者の何らかの知識（一般知識）が関与し，篤志家とピカソがその建物や絵を完成させた動作主として認定されると考えられる。また意味解釈においても，我々の一般知識に照らし合わせてみて，絵や建物の作成にふさわしい人物として認知的に十分に明示的な人であれば，適切な文として受け入れられると考えられる（高見 1995の「特徴づけ」と比較参照）。このように話者の直接的・個別的な知識に基づくのでなく，一般知識に基づいて動作主を結びつけることができる「非直示型」の場合は，（固有名詞などの）特定の個人が動作主であっても，受身2を成立させることがわかる。

以上から本稿では，受身の成立条件として次の三点をあげることができる。一点は受身文の主語に関する条件，残りの二点は動作主の言語化制約である。第一に，有生性が関与する。すなわち，有生物主語をとる受身1と無生物主語をとる受身2の対立がある。第二に，直示性が関与する。話者が当該の事態を直接見ていて，動作主を特定できるかどうか，あるいは動作主が発話行為への参加者（SAP）かどうかなどが関わってくる。第三に，認知的明示性が関与する。動作主に関する情報が，直接的・個別的な知識に基づいているか，一般知識に基づいているかなどが関わってくる。

これによれば，二種類の受身の成立は次のように説明できる。

(66) a．行為遂行時を基盤にして動作主を言語化する「直示型の認知的明示性」が関与する場合は，話者（の目撃などによる）の直接的・個別的な知識に基づくため，特定の個人（動物も含む）が動作主になりやすい。

⇨ この状況では，有生物主語をとる受身1が典型的に成立する。

b．行為の終点に立って，その結果状態から動作主が表現される「非直示型の認知的明示性」が関与する場合は，推論や一般知識に基づくため，（推論による）不特定の動作主か（一般知識による）特定の個人が動作主になりやすい。

⇨ この状況では，無生物主語をとる受身2が典型的に成立する。

ここで（62）の談話へ関連性の階層に立ち返って，（64）（65）のような受身文がこの階層の上ではどのように説明できるか，を考えてみよう。問題は「非直示型の認知的明示性」とこの階層との折り合いである。実は，この問題も次の提案を受け入れれば解決できる。すなわち，個別的・直接的な知識に基づく固有名詞（個体的な存在）と一般知識に基づく固有名詞（社会的な存在）とを区別し，後者を普通名詞と考えることである。そうすれば，ピカソは個体名でなく，画家としてのピカソとなり，この階層とも不都合を来たさず，うまく説

明できる。[41]そして，その階層と認知的明示性との関係は，認知的に非明示的なものは主題としても取り上げにくいので，談話への関連性も低くなるということで解決される。

今度は，なぜ受身2は普通制約されやすいか，という観点から上記の文を見てみよう。問題は，受身2に見られる「直示型」と「非直示型」の境界はどこにあるかである。これについてはまず，(63b) が (61b) よりは遥かに容認度が上がること，しかしそれにしても，(64) (65) に比べると容認度が下るという，二面性があることを確認されたい。次に，(64) (65) のように，一般知識に基づく「非直示型」には接辞 *-i/-hi/-li/-ki* ではなく，助動詞 *-cita* が用いられていることも確認されたい。実はこの二つの形式は，自発・可能の領域までは重なりを見せる（注29および下記の (68) 参照)。しかし受身になると，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* は主として有生物主語をとる受身1を成立させるのに対して，助動詞 *-cita* は受身1を担うことはできず（非制御再帰も不可能)，主として無生物主語をとる受身2を成立させる，という役割分担が見られるのである。[42]表13を参照されたい。外的要因いついては3．1節参照。

	受身 動作主が認知的に明示的	一人称の自発・可能 外的要因が認知的に非明示的
直示型	*-i/-hi/-li/-ki*（有生物主語）	*-i/-hi/-li/-ki, -cita*（*-toyta*）
非直示型	*-cita*（*-toyta*）（無生物主語）	

表13　受身の二形式と役割分担

表13から (63b) をみると，容認度が上がったとしても相変わらず不自然さが残っているのは，有生性制約が関わっているからであることがわかる (cf. Yeon 1994：138-144)。すなわち，この文は無生物主語であるにもかかわらず，有生物主語と同様の被害性を感じるところに不自然さが現れたのである。これに対して *-cita* は，意味的に日本語の「なる」に対応することからわかるように，基本的には状態変化の意味を基盤にして本動詞から助動詞へと文法化したものである (Lee 1993, 鄭 1999参照)。(一方，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* は，3．1

(41) 詳細は鄭 (2006：第6章) および鄭 (2007) を参照されたい。鄭によれば，名詞句の意味解釈レベルには表示レベルと機能レベルがあり，両者は区別する必要がある。たとえばチョムスキーは，表示レベルでは個体名としてのチョムスキーであるが，機能レベルでは言語学者としてのチョムスキーとなる。また前者は「個体モデル」，後者は「社会モデル」という，それぞれ異なるモデルにおいて概念化されたものとされる。これによれば，目撃など話者の個別的・直接的な知識に基づく「直示型の認知的明示性」は個体モデルに属し，一般知識に基づく「非直示型の認知的明示性」は社会モデルに属することになる。

(42) 鷲尾 (2005：12-15) は，受身形式には BECOME 型と AFFECT 型があるとし，助動詞 *-cita* は BECOME 型，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* は AFFECT 型であると分類する。また BECOME 型は「非対格型」，AFFECT 型は「他動詞型」とも呼んでいるが，後者については本稿と意見が異なる（注45参照)。

節でのべたように，主格名詞句には移動物が好まれ，典型的な状態変化自動詞とはそもそも相性がわるい。)

したがって次のように，話者の目の前で事態が起こっていて，それを見ながらその事態についてのべるという「直示型」の状況を設定した場合，母語話者は（67a）を若干すわりがわるいと判断するか，（67b）にすぐ置き換えたがるであろう。状態変化の描写には後者の方がより適切であるからである。今度は（68）（69）のように可能の意味合いを強めてみると，（67a）と（67b）が見せる対比は解消され，両者の距離は縮まる。[43] すなわち，状態変化には *-cita* がより好まれるが，可能の場合は両形式とも適格に用いることができる。

(67) a. ?pipalam-ey namwuskaci-ka kkekk-*i*-ko iss-ta.（自動詞？，受身２？）
雨風-LOC 木の枝-NOM 折る-?INTR/?PASS-PROGR-DEC
意図：‘雨風に木の枝が折れつつある。’

b. pipalam-ey namwuskaci-ka kkekk-e-*ci*-ko iss-ta.（自動詞？，受身２？）
雨風-LOC 木の枝-NOM 折る-?INTR/?PASS-PROGR-DEC
‘雨風に木の枝が折れつつある。’

c. pipalam-ey namwuskaci-ka kkekk-*i*-e-*ci*-ko iss-ta.（受身２）
雨風-LOC 木の枝-NOM 折る-PASS-PASS-PROGR-DEC
‘雨風に木の枝が折られつつある。’

(68) a. amwuli hay-po-a-to na-hanthey-nun namwuskaci-ka cal an
いくらやって見ても 私-DAT-TOP 木の枝-NOM よく Neg.
kkekk-*i*-n-ta.
折る-POTEN-PRES-DEC
‘いくらやって見ても，私には木の枝がなかなか折れない。’（可能：一人称）

b. amwuli hay-po-a-to na-hanthey-nun namwuskaci-ka cal an
いくらやって見ても 私-DAT-TOP 木の枝-NOM よく Neg.
kkekk-e-*ci*-n-ta.
折る-POTEN-PRES-DEC
‘いくらやって見ても，私には木の枝がなかなか折れない。’（可能：一人称）

(69) a. i namwuskaci-nun (an) kkekk-*i*-n-ta.（可能：不特定多数）
この 木の枝-TOP (Neg.) 折る-POTEN-PRES-DEC
‘この木の枝は（誰がやっても）折れる／折れない’

(43) 日本語の「折れる」も状態変化と可能の意味の境界が曖昧である（寺村 1982参照）。

b．i　namwuskaci-nun　(an)　kkekk-e-*ci*-n-ta.（可能：不特定多数）
この　木の枝-TOP　(Neg.)　折る-POTEN-PRES-DEC
‘この木の枝は（誰がやっても）折れる／折れない’

さらにこの二つの形式は，状態変化を表す場合は（67c）のように，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* に *-cita* を重ねることもできる（しかし，その逆の ***kkekk-e-ci-i-ko-iss-ta*** は不可能）。一般的にはこの現象は二重受身（double passive）と呼ばれているが，二つの形式が表している意味を単純に足し算的に考えれば，*-cita* の付加は接辞 *-i/-hi/-li/-ki* が表せない状態変化の局面を補充していることに過ぎない。しかしこの重複によって，（67c）を（前の二文よりもっと）受身らしい文として判断するという，相乗効果がもたらされたのである。

一方，権（1993）が主張するように，助動詞 *-cita* は，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* より歴史的に後から発達したものであることを考えると，さらに面白い事実が浮かび上がる。それは，日本語でも（64）（65）のような受身は日本語非固有の受身とされ（金水 1993），歴史的に後から発達したものとされるからである（注28，注29を参照）。両言語において同様の状況が窺える。この状況と本稿の共時的分布から観察された連続性を根拠にして，もし大胆な仮説をのべることが許されるならば，両言語における受身文の歴史的発達は「直示型の認知的明示性」を基盤にして，そこから「非直示型の認知的明示性」を受け入れる方向へと展開した，といえるかもしれない。いずれにしろ，韓国語の場合「非直示型」の受身2には，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の制約が多いため，助動詞 *-cita* の使用が多くなることが予測される。この点については歴史的変化も視野に入れて考察する必要があるので，今後の課題として残す。

最後に，（62）の階層との関連からもう一つ確認しておきたいことがある。韓国語学では，次のような文も一般的には受身であるとされる（Yeon 1994：143，徐 1996：1060，任 1998：317）。もしこの文が受身だとすれば，最も談話への関連性が高い一人称を通り越して，最も関連性の低い無生物が主語の位置にくることになる。しかし本稿の定義によれば，この文は受身でなく自発であるため，一人称は経験者主語となり，（62）の階層に反しない。

(70) a．na-nun　ce　san-ul　cal　po-n-ta.（能動：意図的）
私-NOM　あの　山-ACC　よく　見る-PRES-DEC
‘私はあの山をよく見る。’

b．na-eykey-nun　ce　san-i　cal　po-*i*-n-ta.（自発：非意図的）
私-DAT-TOP　あの　山-NOM　よく　見る-SPON-PRES-DEC
‘私にはあの山がよく見える’

この文を自発と見る根拠として第一に，(70b) は能動文とは意味的に対応せず，非意図的である。また能動文では副詞の「よく」が回数の意味を表せるが，(70b) では表せない。第二に，(70b) の一人称は始発動作主＝動詞語根動作主であり，同時に経験者でもある。したがって (70b) の山は視覚活動によって影響を被る被動者でなく，一人称の目に映る山の視覚映像である（注25参照）。第三に，経験者主語が三人称の場合は不自然である。

実際 Yeon (1994：143-144) は (71) を受身文として成立すると考え，韓国語における能動と受身の選択には有生性の程度 (the degree of animacy) は関与しないと主張する。しかし実は，(71b) のように動作主が三人称の場合は小説の地の文においてのみ成立可能であり，普通は不自然である。つまり，この文には心理動詞文と同種の制約があり，それは他ならぬ第三者の視覚的経験を直接語ることができないことからくるものである（注18も参照）。

(71) a. (kapcaki) Minho-ka khun cimsung-ul po-ass-ta.
(suddenly) Nom big animal-Acc see-Past-Dec
"(Suddenly) Minho saw the big animal."

b. (kapcaki) Minho-eykey khun cimsung-i po-*i*-ass-ta.
(suddenly) by big animal-Nom see-Pass-Past-Dec
"(Suddenly) The big animal was seen by Minho."

Yeon (1994：143)

さらに，次のような特徴もある。この動詞には一人称の自発・可能と不特定多数の自発・可能までは成立するが，山の潜在的属性をのべる自動詞文は不適格である。また (71b) のように特定の個人も普通は不自然である（(44) も参照）。

(72) a. amwuli polye-ko hayto san-i cal an po-*i*-n-ta.（可能：一人称）
いくら見ようとしても 山-NOM よく neg. 見る-POTEN-PRES-DEC
'いくら見ようとしても，山が良く見えない（を見ることができない）。'

b. ce san-un nwukwu-eykey-na ta cal
あの 山-TOP 誰-DAT-でも みんな よく
po-*i*-n-ta.（自発・可能：不特定多数）
見る-SPON/POTEN-PRES-DEC
'あの山は誰にでもみんなよく見える（見ることができる）。'

c. #ce san-un po-*i*-n-ta.（＊自動詞：潜在的属性）
あの 山-TOP 見る-POTEN-PRES-DEC 'あの山は見える（ものだ）。'

4.4 非制御再帰から受身1への連続性と意味対立

さて他動詞Bタイプは，図6に示したように，使役化はできないが，自動化においては一人称自発・可能と非制御再帰の二方向への派生が見られる。この状況を *chata*‘蹴る’を取り上げて確認してみよう。

次の例を見られたい。(73) は可能と自発，(74) は非制御再帰の例である。両者の間の明確な対比は，自発・可能の場合は（背景化された）一人称と不特定多数が動作主とされ，現在時制をとるのに対して，非制御再帰は過去時制をとり，動作主は（一人称も含む明示的な）特定の個人である点である。すなわち両者は，一人称は共通に許容するが，不特定多数か特定の個人か，現在時制か過去時制か，といった分化が見られる。したがって (74b) のように，非制御再帰が現在時制をとる場合は不自然である。[44]

(73) a. kong-i mwul-ey cec-e comchelem cal an
ボール-NOM 水-LOC 濡れて なかなか よく Neg.
‘ボールが水に濡れて（私には）うまく蹴れない。’
cha-*i*-n-ta.（可能：一人称）
蹴る-POTEN-PAST-DEC

b. pwupwussawum ha-nun kel poni, cello hye-ka
夫婦喧嘩しているのをみると， おのずと 舌-NOM
cha-*i*-n-ta.（自発：一人称）
蹴る-SPON-PRES-DEC
‘夫婦喧嘩しているのをみると，自然に舌を打ってしまう。’

c. mwul-ey cec-un kong-un (nwu-ka cha-to) cal an
水-LOC 濡れる-REL.PAST ボール-TOP（誰-NOM 蹴る-も） よく Neg.
cha-*i*-nun pep-ita.（可能：不特定多数）
蹴る-POTEN-REL.PRES 法-DEC
‘水に濡れたボールは（誰が蹴っても）なかなか蹴られないものだ。’

(74) a. Yengi/nay-ka ttwuy-e-ka-taka kuman pal-ey tol-i
ヨンイ／私-NOM 走る-行く-途中 つい 足-LOC 石-NOM
cha-*i*-ess-ta.（非制御再帰）
蹴る-nonconREFL-PAST-DEC
‘ヨンイ／私が走っていく最中つい足に石が当たってしまった’

(44) ただし三人称主語の現在時制は，小説の地の文やラジオ実況中継の場合は許される。

b．??Yengi/nay-ka ttwuy-e-ka-taka kuman pal-ey tol-i
ヨンイ／私-NOM 走る-行く-途中 つい 足-LOC 石-NOM
cha-*i*-n-ta.（非制御再帰）
蹴る-nonconREFL-PRES-DEC
‘ヨンイ／私が走っていく最中つい足に石が当たる。’

さらに他動詞Bタイプは，使役化は許容されないにもかかわらず，使役と構文を共有する受身1を成立させ，しかも二重主格受身も成立させることができる。このような特徴は *palpta*‘踏む’，*cciluta*‘刺す’，*caluta*‘切る’など，他動詞Bタイプの中でも「他者の領域に行為が及ぶ」という意味領域に対応できる動詞（表12参照），すなわち他者への影響力が強い動詞には，共通して見られる。

(75) a．Chelswu-ka Yengi-uy engtengi-lul cha-ss-ta..（能動）
チョルス-NOM ヨンイ-GEN お尻-ACC 蹴る-PAST-DEC
‘チョルスがヨンイのお尻を蹴った。’
b．Yengi-ka Chelswu-eykey engtengi-lul cha-*i*-ess-ta.（*使役／受身1）
ヨンイ-NOM チョルス-DAT お尻-ACC 蹴る-PASS-PAST-DEC
‘*ヨンイがチョルスにお尻を蹴らせた。’
‘ヨンイがチョルスにお尻を蹴られた。’
c．Yengi-ka Chelswu-eykey engtengi-ka cha-*i*-ess-ta.（二重主格受身）
ヨンイ-NOM チョルス-DAT お尻-NOM 蹴る-PASS-PAST-DEC
直訳：‘ヨンイがチョルスにお尻が蹴られた。’

ではなぜ，他動詞Bタイプには受身1と二重主格受身が同時に成立できるだろうか。本稿では，その鍵を非制御再帰の存在に求めたい。こう考える理由として，非制御再帰には，意味的・統語的両側面において二重主格受身と受身1にそれぞれ繋がる（と思われる）構文が見つかるからである。非制御再帰が二重主格構文であることについては，すでにのべたとおりである。実は，非制御再帰の第二主格は対格にも交替できる。つまり非制御再帰は，普通は二重主格構文の方が自然であるにしても，(76b) のように身体部分の対格へのコード化も許容されなくはないのである。

(76) a．Yengi-ka (mwu-lul ssel-taka) khal-ey sonkalak-i
ヨンイ-NOM（大根を切る途中） 刃物-LOC 指-NOM

cal-*li*-ess-ta.（非制御再帰）
切る-nonconREFL-PAST-DEC
直訳：‘ヨンイが（大根を切っている途中）刃物に指が切られた。’
‘ヨンイが（大根を切っているとき，うっかり）刃物で指を切ってしまった。’

b．Yengi-ka (mwu-lul ssel-taka) khal-ey sonkalak-ul
ヨンイ-NOM（大根を切る途中） 刃物-LOC 指-ACC
cal-*li*-ess-ta.（非制御再帰）
切る-nonconREFL-PAST-DEC
直訳：‘ヨンイが（大根を切っている途中）刃物に指を切られた。’
‘ヨンイが大根を（切っているとき，うっかり）刃物で指を切ってしまった。’

（76a）では身体部分が主格であり，（76b）では対格である。意味的には両者とも，自分が引き起こした非意図的な事態により，自分自身がその影響を被るという状況である。もし両者の間に何らかの意味的相違があるならば，それは主語名詞句（ヨンイ）に及ぶ影響力の強さであろう。すなわち，身体部分が対格で標示された（76b）が，主格で標示された（76a）よりも文主語に及ぶ影響力が高く，したがってその主語は，いっそう高い物理的被害を被ると理解されるのである。

つまり，主語が被る物理的被害という面において，非制御再帰とパラレルな関係が受身にも見られ，統語的にも身体部分が主格で表される二重主格受身と対格で表される受身1がそれぞれ成立するということである。

（77）a．Chelswu-ka kkangphay-hanthey sonkalak-i
チョルス-NOM やくざ-DAT 指-NOM
cal-*li*-ess-ta.（二重主格受身）
切る-PASS-PAST-DEC
直訳：‘チョリがやくざに手が切られた。’

b．Chelswu-ka kkangphay-hanthey sonkalak-ul cal-*li*-ess-ta.（受身1）
チョルス-NOM やくざ-DAT 指-NOM 切る-PASS-PAST-DEC
‘チョリがやくざに指を切られた。’

一方，受身1が非制御再帰と異なる点は，始発動作主＝動詞語根動作主が，主語名詞句から与格名詞句に移行したこと（2節参照），そして自分（主語）でない他者が動作主として現れたことである。このようにして，受身1はむしろ使役構文との意味的対立を見せるよう

になるが，それは，非制御再帰と同様（身体部分の）対格名詞句があること，しかも，当該の事態が自分（主語）でない他者によってもたらされたことによって行為の方向性の完全なる逆転が実現されたからである。

以上をまとめると，図7のようである。

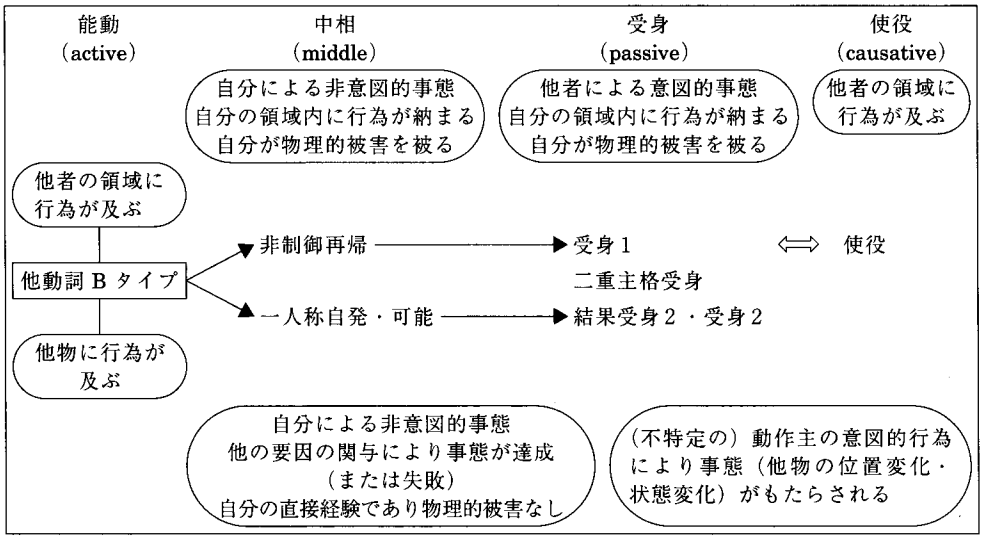

図7　他動詞Bタイプの派生の方向と意味対立：中相から受身への連続性

すなわち，他動詞Bタイプは，使役化は成立しないが自動化においては，非制御再帰と一人称自発・可能の二方向への派生が同時に成立できる。さらに，一方の一人称自発・可能からは結果受身と受身2への連続性が見られ，他方の非制御再帰からは受身1と二重主格受身への連続性が見られる。

最後に，次の疑問にも答える必要があろう。ではなぜ，使役形がない他動詞Bタイプに受身1が成立できただろうか。なぜ，多くの言語学者は受身1を使役構文からの発達であると，疑いなく見なしえただろうか。そこには次の四つの（隠れた）要素が絡んでいたからであると考えられる。第一に，他動詞Bタイプと使役動詞（他動詞A'）の，二つの意味領域が重なっていることである（表12参照）。すなわち，両者は「他者の領域に行為が及ぶ」という意味領域を共有していることである。

第二に，このことにより他動詞Bタイプの能動文と受身文の意味対立が，結果的には使役と受身の意味対立と一致するようになった点である。すなわち，（自分から）他者の領域に行為が及ぶもの（他動詞B，使役）と，（他者から）自分の領域内に行為が納まるもの（受身），という意味対立が出来上がったことである。

第三に，自動化において，他動詞Bタイプには非制御再帰が現れたことである。この事

実は受身1の成立においては最も重要な要素であるが，韓国語学では主として接辞 *-i/-hi/-li/-ki*＝受身という図式のもとでヴォイス現象が分析されてきたため，（一人称の自発・可能範疇も含め）非制御再帰範疇の発見が遅れたことである。本稿では，共時的分布を基盤に構文間の連続性を記述することに徹してきたが，その中から受身1が非制御再帰からの発達であると主張できるいくつかの直接的な証拠が見つかった。それらは，（i）非制御再帰と同様に受身1にも二重主格構文とともに対格構文があり，（ii）非制御再帰と同様に受身1も道具は所格で表され，道具格で表すことができない（(25)（26）参照)。(iii）受身1も再帰的状況が要求される。(iv）両者とも主語は物理的被害を被る，と解釈されることである。

第四に，使役構文と受身構文が表す意味対立が，「やりもらい構文」が表す意味対立と類似する点である。これは，非制御再帰から受身1への展開を仮定する上で，最も重要な要素であるように思われる。つまり，制御再帰から受身構文への展開には「やりもらい構文」が関与し，それに依拠して発達した，というシナリオである。この仮設をサポートする証拠としては次の二点があげられる。（i）受身の補充形式として，動詞 *patta*‘もらう’が用られる。たとえば，*conkyeng-hata*‘尊敬する’の受身は *conkyeng-patta*（尊敬 — もらう）‘尊敬される’である。他にも *mekta*‘食べる’，*ipta*‘着る’，*pota*‘見る’，*tutta*‘聞く’など，多数の他動詞 A タイプ（求心動詞）が受身補充形式として用いられる状況がある。一方（ii）使役の補充形式としては，*cwuta*‘やる’が用いられる。たとえば，*ton-ul son-ey cwuyta*‘お金を（自分の）手に握る’の語彙的使役には，*ton-ul son-ey cwuye-cwuta*‘お金を（他者の）手に（渡して）握らせる’が対応する。また *paywuta*‘教わる’には *paywu-e-cwuta*‘教える’が対応できる（鄭 1999参照)。

以上から，本稿の分析によれば，他動詞 B タイプにおける受身1の成立は，非制御再帰を介して成立したとはいえるが，Haspelmath（1990）や Lee（1991）のシナリオのように，使役から発達したものであるとは思えない。(45)

5．結論

本稿では，使役と受身の関連をめぐる諸問題に対して，現代韓国語が示す共時的分布を基盤に，次の二点を目標に掲げて分析した。第一に，韓国語におけるヴォイス現象の記述的妥当性を構築する。第二に，理論的妥当性を検討する。前者については，言語事実から浮き彫りにされた次の三つの問題意識に対し，これらを統一的に捉えることができる記述枠組みの開発が要請されていた。（i）なぜ韓国語では使役と受身が同一形式で表され，しかも一つ

(45) またこの結論は，鷲尾（2005：12-15）のように韓国語の接辞 *-i/-hi/-li/-ki* を機能的に他動詞型と見なし，被害受身（間接受身）の成立を他動詞的な要素に求める，いわゆる「他動詞起源説」とも相反する結果である。

の構文を両者が共有し，両方の解釈を同時に許すような状況がありうるか。（ii）使役と受身の共通の意味基盤は何か。（iii）このとき両方に使用される接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能は何か。一方後者については，次の二点に対し，韓国語の観点からその妥当性・有効性を検討する必要が生じた。（i）使役と受身の関連を，一方（使役）から他方（受身）への展開として仮定する Haspelmath（1990）の一方向性のシナリオは，韓国語の状況を適切に説明できるか。（ii）行為の発達の観点からヴォイス現象を捉えた Shibatani（2006）のヴォイス・パラメータの提案は，韓国語の状況をどのように説明できるか。また動詞接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能の説明にも有効か。

これらの問題を解決するために，本稿の2節では Shibatani（2006）の「行為の発達」の概念を援用して，分析した。具体的には，当該事態における行為の起点と終点，行為の遂行の三つの局面を導入し，それぞれの局面における事態参加者の意味的機能と文法的コード化の観点から分析した。そこで，使役と受身の間には使役再帰，制御再帰，非制御再帰の三種類の再帰構文があることを明確に示し，それぞれを定義した上で，各構文間の連続関係を位置づけた。引き続き3節では，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の関連構文の範囲を定め，各構文間の連続関係を基盤にしたネットワークを提示した。また関連構文全体を説明できる接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の「言語的コード化原則」を提案した。これによるとこの接辞の機能は，被動者を表現の中心におき，そこから（行為の起源である）外的要因（external cause）を導入するものとされる。そしてこの接辞によって作られるそれぞれの派生構文は，（「認知的明示性」の程度による）外的要因の諸相に応じて自動構文から使役構文まで対応できる。つまり，この接辞は「行為の終点」に立って「行為の起源」をのべ，また「行為の起点」に立っても自分が「行為の終点」をのべる —— いわばヤヌスの顔のような —— 形式であるため，この接辞が関与する派生構造も ——「ヤヌスシステム」であり，したがって —— 反対方向の文法領域を同時に派生できるものとなっている。しかし，受身1（使役構文に依拠したもの）と二重主格受身は，ここからも派生できないことが判明し，別のルートを模索する必要が生じた。

そこで4節では，派生の方向を基準に動詞分類を行い，派生の方向と動詞の意味の間に密接な相関があることを突き止めた。さらに，派生の方向からヴォイス・カテゴリーの連続性を捉えた結果，そこには次のような連続関係が見られた。(78) の（i）（ii）に関しては，より安定的・生産的に作れるヴォイスの高い順から低い順（派生構文のサイズの大きさ順）に並べたものである。

(78) 中相から自動詞へ，受身への連続性

（ｉ）一人称の自発・可能 ＞ 不特定多数の自発・可能 ＞ 潜在的属性の自動詞

（ii）一人称の自発・可能 ＞ 結果受身 ＞ 受身２（無生物主語）

（iii）非制御性再帰 ＞ 二重主格受身・受身１（有生物主語）

ここで注目すべきは，他動詞の自動化には，一人称の自発・可能と非制御再帰の二方向性が見られること，そして（ii）と（iii）が表す対比である。（ii）が一人称の自発・可能から受身２への連続性を示すのに対して，（iii）は非制御再帰から受身１への連続性を示す。また受身２では，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の制約が多く，助動詞 *-cita* を用いる傾向が顕著であるのに対して，受身１は接辞 *-i/-hi/-li/-ki* のみ許し，助動詞 *-cita* は不可能である。最も特記すべきは，（iii）に関与する動詞は，主として使役形をもたない他動詞（B タイプ）であり，他動詞（B タイプ）から受身１が成立すると，その受身構文は能動だけでなく，使役とも意味的対立をなすという点である。そこで本稿では，次のように仮定した。第一に，受身１は非制御再帰から発達したものである。第二に，非制御再帰から受身１への展開には「やりもらい構文」が関与し，それに依拠して発達した。この仮説を支持する証拠として，非制御再帰を許容する他動詞（B タイプ）が主として受身１を作れること，両構文には意味的・統語的両側面において類似性が多いこと，そして受身と使役の補充形式として「やりもらい動詞」が用いられていること，などがあげられた。

本稿のこのような結論は，Haspelmath（1990）の一方向性のシナリオは，韓国語の状況を説明できないものであることを表す。さらに Haspelmath が提示したように，使役から使役再帰を経て受身へと展開するものでもない。一方，Shibatani（2006）のヴォイス・パラメータは，使役と受身だけでなく，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の関連構文全体の成立が説明でき，接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能そのものの説明にも有効であることがわかった。要するに，この接辞は行為の終点にある被動者を表現の中心におき，行為の起源を言及するヴォイス形式だったのである。

しかし，Shibatani が定義する自発範疇に関しては本稿と若干意見が異なる。Shibatani は行為が無意志的にもたらされたものを自発と定義し，自発を受身への展開における重要なステップとして捉えている。本稿では，行為が非意図的にもたらされたものには非制御再帰と自発・可能があり，両者は統語的・意味的な理由により区別されるべきであることを主張した。Shibatani（2006）をみると，本稿で定義された非制御再帰は自発範疇の中に含まれている。その状況は，Shibatani（2006：225）が提示した次のロシア語の例から窺うことができる。

(79) a. Kostja poreza-l xleb
Kostja cut.PERF-PAST.SG.MASC bread
'Kostja cut the bread.'

b. Kostja poreza-l-sja
Kostja cut.PERF-PAST.SG.MASC-SPON
'Kostja had cut [accidentally] himself.

そこで本稿では，Shibatani のヴォイス・パラメータに対して次のような提案をした。非制御再帰と自発・可能は「行為の起源」を言及しながら「行為の展開」を問題にする点において，三者とも中相範疇に属する。

以上の議論から，言語分析において，一方から他方への展開という（進化論的な）考え方よりも，そのような現象を引き起こす前提なるものを突き止めることが重要であることが主張できる。本稿では，その前提なるものを接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能に求めたことで，ヴォイスの機能範疇にたどり着くことができたと考えられる。

最後に，本稿で提供された記述の枠組みおよび分析結果が他言語の状況にどのように適用できるかは，今後の課題である。

略語一覧

ACC; accusative, CAUS; causative, cauREFL; causative reflexive, conREFL; controlled reflexive, DAT; dative, DEC; declarative, GEN; genitive, HON; honorific, INST; instrument, INT; interrogative, INTR; intransitive, LOC; locative, MASC; masculine, MOD; modal, Neg.; negative, NOM; nominative, nonconREFL; non-controlled reflexive, PASS; passive, PAST; past, PERF; perfect, POTEN; potential, PRES; present, PROG; progressive, REFL; reflexive, REL; relative, RESULT; resultative, SG; singular, SPON; spontaneous, TOP; topic

参考文献

権在一（1993）「韓国語　被動法의　歴史的変化」『言語学』15，pp. 25–41.

金錫得（1979）「国語의　被使動」『言語』4－2，pp. 181–192.

金韓坤（1983）「이른바 '이' 使役・被動의　話用論的　条件」『한글』180，pp. 35–52.

朴良圭（1978）「使動과　被動」『国語学』7，pp. 47–70. 国語学会.

徐正秀（1996）『国語文法』漢陽大学校出版院.

宋복승（1995）『国語의　論項構造研究』報告社.

梁東揮（1979）「国語의　被・使動」『한글』166，pp. 33–49.

李相億（1970）『国語의　使動・被動　構文研究』国語研究26．서울大学校．

李익섭・任洪彬（1983）『国語文法論』学研社．

李향천（1991）『被動의　意味와　起源』博士論文．서울大学校．

任洪彬（1998）「国語被動化의　意味」任洪彬（著）『国語文法의　深層 ― 語彙範疇의　統辞와　意味 ―』pp.307-332．태학사．

鄭聖汝（2001）「自動詞의　受動化와　態範疇 ―― 韓日語比較의　観点에서 ――」『言語科学研究』19，pp.263-290．大邱：言語科学会．

崔鉉培（1994［1937］）『우리말본』正音出版社．

池上二良（1997）『ウィルタ語辞典』北海道大学図書刊行会．

池上嘉彦（2006）「「主観的把握」とは何か」月刊言語35-5，pp．20-27．

風間伸次郎（2005）「ツングース諸語のヴォイス」平成17年度第一回「形態・統語分析における ambiguity（曖昧性）―― 通言語的アプローチ ――」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所プロジェクト研究会口頭発表．

川村大（2005）「ラレル形述語文をめぐって ―― 古代語の観点から ――」『日本語文法』5-2．pp.39-56，くろしお出版．

金水敏（1993）「受身文の固有・非固有性について」『近代語研究9』pp.473-508．武蔵野書店．

栗林裕（2005）トルコ語の使役構文と意味的曖昧性について」平成17年度第一回「形態・統語分析における ambiguity（曖昧性）―― 通言語的アプローチ ――」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所プロジェクト研究会口頭発表．

佐々木勲人（1997）「第4章：中国語における使役と受身の曖昧性」伊藤真他6人（共著）『ヴォイスに関する比較言語学的研究』pp.133-160．筑波大学現代言語学研究会．

柴谷方良（2004）「ヴォイス ―― その本質と範囲 ――」『日本語文法学会第5回大会発表論文集』pp．1-10．

渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1，pp．1-262．大阪大学文学部．

高見健一（1995）『機能的構文論による日英語比較 ―― 受身文，後置文の分析 ――』（柴谷方良・西光義弘：影山太郎（編）日英語対照シリーズ4）東京：くろしお出版．

鄭聖汝（1999）『他動性とヴォイス（態）―― 意味的他動性と統語的自他の韓日語比較研究 ――』博士論文，神戸大学．

鄭聖汝（2004）「韓国語の自動詞とヴォイス ―― 自発と受身の連続性 ――」影山太郎・岸本秀樹（編）『日本語の分析と言語類型：柴谷方良教授還暦記念論文集』pp.319-335，東京：くろしお出版．

鄭聖汝（2005）「韓国語における使役と受身の曖昧性」平成17年度第一回「形態・統語分析における

ambiguity（曖昧性）―― 通言語的アプローチ ――」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所プロジェクト研究会口頭発表.

鄭聖汝（2006）『韓日使役構文の機能的類型論研究 ―― 動詞基盤の文法から名詞基盤の文法へ ――』シリーズ言語対照９．東京：くろしお出版.

鄭聖汝（2007）「大阪城は誰が建てたか ―― 使役連続性を超えて：日韓対照の観点から ――」『神戸言語学論叢：西光義弘教授還暦記念号』５．pp.21-34.

中村芳久（2006）「言語における主観性・客観性の認知メカニズム」月刊言語35-５，pp.74-82.

益岡隆志（1987）『命題の文法 ―― 日本語文法序説 ――』東京：くろしお出版.

松下大三郎（1930）『標準日本口語法』中文館書店.

円山拓子（2006）「補助動詞지다 jida が表す『可能』の意味分析」『東京大学21世紀 COE プログラム「心とことば ―― 進化認知科学的展開」研究報告書：日本語と朝鮮語の対象研究』pp.63-76. 研究代表者：生越直樹.

ヤコブセン，ウェスリー.M.（1989）「他動性とプロトタイプ論」久野暲・柴谷方良（編）『日本語学の新展開』pp.213-248, 東京：くろしお出版.

養老孟司（2004）『形を読む ―― 生物の形態をめぐって ――：新装版』培風館.

鷲尾龍一（1997），「第１章：比較文法論の試み ―― ヴォイスの問題を中心に ――」伊藤真他６人（共著）『ヴォイスに関する比較言語学的研究』pp. １-66. 筑波大学現代言語学研究会.

鷲尾龍一（2005）「受動表現の類型と起源について」『日本語文法』５-２．pp. ３-20, くろしお出版.

Bybee, John L (1985) *Morphology: A Study of the Relation between Meaning and Form*. Amsterdam: John Benjamins.

Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*. CSL 69.Cambridge: Cambridge University Press.

Fillmore, Charles J. (1968) The case for case. In E. Bach and R. T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*, pp.1-88. New York: Holt, Rinehart and Winston. [チャールズ J・フィルモア（著）・田中春美・船城道雄（訳）（1975）『格文法の原理 ― 言語の意味と構造 ―』東京：三省堂．に収録]

Haiman, John (1983) Iconic and economic motivation. *Language* 59. pp.781-819.

Haspelmath, Martin (1990) The grammaticalization of passive morphology. *Studies in Language* 14-1. pp.25-72.

Kageyama, Taroo (2006) Property Description as a Voice Phenomenon. *Voice and Grammatical Relations: in Honor of Masayoshi Shibatani*, pp.85-114. Amsterdam: John Benjamins.

Kemmer, Suzanne (1993) *The middle voice*. Typological Studies in Language 23. Amsterdam: John Benjamins.

Kim Han-kon (1982) Cause as the Deep Semantic Source of so-called 'Causative' and 'Passive' : with Special Reference to the Metaphorical Interpretation of the i-Morpheme in Korean. *Language Research* 18-1, pp.171-95.

Kim, Hee-soo (2005) *Causatives, Passives and their Ambiguities in Korean, Japanese and English*. Ph. D., The University of Michigan.

Kim, Kyung-hwan (1995) *The syntax and semantics of causative constructions in Korean*. Seoul: Thaehaksa.

Kim, Nam-kil. (1991) Types of State and Passive in Resultative. *Korean Language Education*. Vol. 3, pp.25-44.

Klaiman, M. H. (1991) *Grammatical Voice*. Cambridge University Press.

Langacker, Ronald W. (1987) *Foundation of Cognitive Grammar* vol. 1: *Theoretical Prerequisites*. Stand-ford: Standford University Press.

Langacker, Ronald W. (1990) Subjectification. *Cognitive Linguistics1*, pp.5-38.

Lee, Chung-min (1974) *Abstract Syntax and Korean with Reference to English*. Seoul: Pemhansecek.

Lee, Chung-min (1976) Cases for Psychological Verbs in Korean. *Korean Journal of Linguistics* 1-1, pp.256-296.

Lee, Kee-dong (1976) Arguments against Lexicalization: With Reference to Deajectival Causatives in Korean. *Korean Journal of Linguistics* 1-1, pp.237-255.

Lee, Kee-dong (1993) *A Korean Grammar: on Semantic-Pragmatic Principles*. Seoul: Hankwukmwun-hwasa.

Malchukov, Andrej L. (1993) The Syntax and Semantics of Adversative Constructions in Even. *Gengo Kenkyu* 103, pp.1-36.

Park, Jeong-woo (1994) *Morphologycal Causatives in Korean: Problems in Grammatical Polysemy and Constructional Relations*. Ph. D., University of California at Berkeley.

Perlmutter, David (1978) Impersonal passive and the unaccusative hypothesis. *BLS* 4. pp.157-189.

Shibatani, Masayoshi (1985) Passive and related constructions. *Language* 61-4, pp.821-848.

Shibatani, Masayoshi (2006) On the Conceptual Framwork for Voice Phenomena. *Linguistics* 44-2, pp.217-269.

Washio, Ryuichi (1995) *Interpreting Voice: A Case Study in Lexical Semantics*, Tokyo: Kaitakusya.

Yeon, Jae-hoon (1991) The Korean Causative-passive Correlation Revisited. *Language Research* vol 27-2, pp.337-358.

Yeon, Jae-hoon (1994) *Grammatical Relation Changing Constructions in Korean: A Functional-Typological Study*. Ph. D., SOAS. University of London.

Where does the ambiguity between causative and passive come from?: An investigation into the functions of Korean verbal suffixes *-i/-hi/-li/-ki*

Sung-Yeo CHUNG

Abstract

In this article, based on their synchronic distributions in the Modern Korean, I analyze various problems related to how the causative and passive are related, with the following two objectives--- first, to achieve a descriptive adequacy of voice phenomena in Korean, and second, to discuss the theoretical adequacy of that description.

For the first objective, it was necessary to develop a descriptive framework to deal in a unified way with the following three problems that became clear on the basis of the observed linguistic facts: (i) Why is it possible that both causative and passive in Korean are expressed with the same form and both share the same construction, i.e., why the same form can bear two interpretations?; (ii) What is the common semantic ground between causative and passive?; (iii) What are the functions of the *-i / -hi / -li / -ki* suffixes when employed in causative and passive meanings? For the second objective, it was necessary to examine the adequacy of Haspelmath's scenario and the validity of Shibatani's voice parameters against the linguistic facts of Korean itself to answer the following two questions: (i) Can the unidirectional scenario in Haspelmath (1990), which interprets the homonymous relationship between causative and passive as a development from the causative to the passive, adequately explain the Korean phenomena?; (ii) How can the voice parameters approach taken in Shibatani (2006), which explicates voice (diathesis) in terms of the development of an action, explain the Korean phenomena, and is it valid for explaining the functions of the verbal suffixes *-i / -hi / -li / -ki*?

To achieve the above goals, in Section 2, I incorporate Shibatani (2006)'s notion of "the development of an action" in my analysis of the Korean constructions. Specifically, I introduce three phases: the starting point of an action, the end point of an action, and the carrying out of an action in given event. I analyze the constructions in terms of the semantic functions and grammatical encoding of event participants in each phase. Then I illustrate three kinds of reflexive constructions intermediating causative and passive, i. e., the causative reflexive, the controlled reflexive, and the non-controlled reflexive.

Working from the general properties of these three constructions, I identify the continuity between them.

In Section 3, I identify the ranges of constructions related to the suffixes *-i / -hi / -li / -ki*, and diagram a network based on the continuous relationship between the constructions. Then I propose "principles of linguistic encoding" for the suffixes *-i / -hi / -li / -ki*, which can account for the entirety of related *-i / -hi / -li / -ki* constructions. These principles show that these suffixes have as their basic functions focus on the patient as the center of the expression as well as the introduction of an external cause from which the action originates. The related constructions that these suffixes generate range from the intransitive construction to the causative construction, depending on the nature of the external cause. The function of the suffixes, in other words, is to depict "the origin of an action" from the standpoint of "the end point of an action" and to depict "the end point of an action" from the standpoint of "the starting point of an action". Therefore, the suffixes function as if "Janus-faced" and each of the related constructions that is expressed with them as part of "the Janus system" can carry two meanings that pertain to the opposite grammatical domain. However, it turns out to be the case that Passive 1, which is based on the causative construction, and the double nominative passive may not be derived via the same derivational path, so that we need to find a different path for them.

In Section 4, I classify verbs based on the directions of derivation, and argue that there is a close correlation between the direction of derivation and verb meaning. Furthermore, by observing the continuity between voice categories in terms of direction of derivation we can see the following continuity, as set out below. (i) and (ii) are locatable along the scales according to its degree of stability and productivity from more highly stable and productive to less.

<u>The continuity from middle to intransitive to passive</u>

(i) 1st person spontaneous/potential > generic spontaneous/potential > intransitive of latent attribute

(ii) 1st person spontaneous/potential > resultative passive > Passive 2 (inanimate subject)

(iii) non-controlled reflexive > double nominative passive, Passive 1 (animate subject)

Attention should be paid to the two possibilities for the intransitivization of transitive verbs, in the 1st person spontaneous/potential and the non-controlled reflexive, and the contrast between (ii) and (iii). The direction in (ii) shows a continuity from the 1st person spontaneous/potential to Passive 2, while that in (iii) shows a continuity from the non-controlled reflexive to Passive 1. Also Passive 2 is subject to a number of constraints imposed on the suffixes *-i / -hi / -li / -ki*; More often than not one must use the auxiliary verb *-cita*. In contrast Passive1allows only the suffixes *-i / -hi / -li / -ki*, not the auxiliary verb *-cita*. The most striking fact is that the verbs that enter into (iii) are mainly B-transitive verbs, which do not have causative forms, and that the Passive1based on a B-transitive verb semantically contrasts with a causative construction as well as with an active clause. In this article, I make the following assumptions: first, Passive1is developed from the non-controlled reflexive; second, the development from the non-controlled reflexive to Passive1involved the "*give-get* construction" and took place based on it. Evidence in support of this hypothesis comes from the fact that B-transitive verbs, which allow the non-controlled reflexive, mainly form Passive1; that there are a lot of similarities between the two constructions in both semantics and syntax; and that the "*give-get*" verbs are used as suppletive forms for passive and causative.

In this article I conclude that the unidirectional scenario presented in Haspelmath (1990) can not explain the Korean phenomena. Furthermore, the conclusion I draw does not assume a development from causative to passive via causative reflexive as conjectured by Haspelmath. Moreover, it turns out that the voice parameters in Shibatani (2006) are valid explanations of all the constructions related by the suffixes *-i / -hi / -li / -ki* per se as well as the causative and passive, and can explain the functions of the suffixes *per se*. Differently put, these suffixes are voice forms that in themselves select the patient (the end point of an action) as the center of the expression and refer to what the origin of an action is.